目次

プログラム・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１
Ⅰ　挨拶
１　ワークショップ主催挨拶（最上　眞理子）・・・・・・・・・・・・・・・２
２　ワークショップ主催挨拶（西條　節子）・・・・・・・・・・・・・・・・３
３　登別市長　挨拶（小笠原　春一）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４
Ⅱ　ワークショップのねらい（大江　守之）・・・・・・・・・・・・・・・・６
Ⅲ　グループリビング論（大江　守之）・・・・・・・・・・・・・・・・・・７
Ⅳ　講演
１　全国高齢者生き活きグループリビングの実態調査報告
「自立と共生」理念と実現のための支援（土井原奈津江）　・・・・１４
２　高齢者生き活きグループリビング運営報告
１．たすけ愛の家（星川　光子）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・２３
２．ほがら館（佐々木　幸子）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３０
３．明日への風（渡邉　壽江）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３５
Ⅴ　ディスカッション
１　問題提起　小規模の暮らしの優位性と問題点　・・・・・・・・・・・４３
２　問題提起　「自立と共生」の理念と暮らし　・・・・・・・・・・・・４６
３　問題提起　「自立と共生」の理念と地域の関わり　・・・・・・・・・４９
Ⅵ　全国高齢者生き活きグループリビング支援事業
１　高齢者生き活きグループリビング登別宣言について　・・・・・・・５４
要望書（案）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５５
Ⅶ　見学会　報告　NPO 法人いぶりたすけ愛
１　見学地の概要　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５６
２　建物写真　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６５
３　居住者懇談会　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７０
４　居住者インタビュー　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７１
Ⅷ　アンケート結果　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７６
Ⅸ　ワークショップを終えて　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７８

プログラム

	時間		担当
1日目	14:00~14:10	NPO法人COCO湘南　挨拶	最上眞理子 氏 西條節子 氏
	14:10~14:15	登別市長　挨拶	小笠原春一 氏
	14:15~14:25	本日の進め方	大江守之 氏
	14:25~14:40	高齢者生き活きグループリビングの実態調査報告	土井原奈津江 氏
	14:40~14:55	グループリビング報告・問題提起	星川光子 氏
	14:55~15:10	グループディスカッション	
	15:10~15:25	発表・まとめ	
	15:25~15:40	休憩	
	15:40~15:55	グループリビング報告・問題提起	佐々木幸子 氏
	15:55~16:10	グループディスカッション	
	16:10~16:25	発表・まとめ	
	16:25 ~16:45	休憩	
	16:45~17:00	グループリビング報告・問題提起	渡邉壽江 氏
	17:00~17:15	グループディスカッション	
	17:15~17:30	発表・まとめ	
	17:30~17:40	休憩	
	17:40~18:00	まとめ	大江守之 氏 夏目幸子 氏
	18:30~20:30	交流懇親会	
2日目	9:00~9:30	見学地へ出発	
	9:30~11:30	たすけ愛の家見学	

- ワークショップ・宿泊地
  登別グランドホテル
  〒059-0592　北海道登別市登別温泉町 154
- 見学地
  NPO法人 いぶりたすけ愛「たすけ愛の家」
  〒059-0023　北海道登別市桜木町３丁目２－１０

Ⅰ．挨拶

１　ワークショップ主催挨拶

最上 眞理子 氏
● NPO法人
COCO湘南　理事長

二級建築士・宅地建物取引主任者・福祉住環境コーディネーター
COCO湘南台の開設に先立つ「高齢者バリアフリー研究会」メンバー
2010年　NPO法人 COCO湘南理事長就任

みなさま、こんにちは。今日はようこそ、このワークショップにお出かけいただきまして、大変ありがとうございます。考えれば、3月12日にこのワークショップを予定していたわけですが、前日の3.11東日本大震災に見舞われまして、その後皆様がそれぞれの立場で乗り越えて、このようにお会いすることができ、皆様のご努力に対して、また私どものスタッフみんなも非常に頑張って今日を迎えることができました。大変ありがとうございます。

16年前になりますか、名誉理事長の西條節子さんと共に高齢者のグループリビングを立ち上げようということで、市民力で私達の手で「お金もない、土地もない」という「ないない尽くし」の私どもがグループリビングの実現を目指して、いろいろなハードルを乗り越えて、12年前にグループリビングCOCO湘南台をスタートすることが出来ました。その中で生活者として西條節子さんが実際にこの暮らしの実証をするというか、「自立と共生」という暮らし方が高齢者や私どもの第三の人生をどれだけ充実させるかということで身をもって全国に発信してきました。全国にこうやって(財)JKA のお力もいただきながら、グループリビングが生まれてきまして、さらに今後いろいろな形での課題も出てきております。そういったことも今日、大江教授の下、皆様と共にこのワークショップで「自立と共生　理念と実現のための支援」ということで今日１日、皆様と共に充実したワークショップの時間を開催できたらと思います。

それから私どもは NPO として３つのグループリビングを運営しているわけですが、COCO ありまというグループリビングが神奈川県海老名市にございます。海老名市の内野市長に「登別でワークショップをやるんです」と申しましたら、内野市長が「登別とは姉妹都市なんだよ。地元の小笠原市長とも大変好意にしているし、住民同士もいろいろな形で交流をしているから、市長にお願いして参加してもらおうよ」とお声掛けを頂きまして、今日は登別市長の小笠原様にもおいでいただいております。この後ご挨拶を頂きますが、本当にこうした地元の皆様やそれぞれの地域のコミュニティの中で見守られながら、実際に活動をしていることが皆様良くお分かりかと思います。今日 1 日どうぞよろしくお願い申し上げます

２　ワークショップ主催挨拶

西條 節子 氏

● ＮＰＯ法人
　ＣＯＣＯ湘南　名誉理事長

神奈川県藤沢高校教諭をへて
藤沢市議会議員を６期２４年務める。
社会福祉法人藤沢育成会　元理事長
ＣＯＣＯ湘南台開設に先立つ「高齢者バリアフリー研究会」メンバー
ＮＰＯ法人 ＣＯＣＯ湘南　元理事長

みなさま、こんにちは。お久しぶりです。広島からもおいで下さって、懐かしい思いです。市長さんもおいでくださいましてありがとうございます。私もこうして元気に来られたのは、グループリビングのおかげで、そこで暮らして12年目です。もうちょっとで83歳です……もう少し生きると思いますから(笑)そんなわけで、いろいろと各地の皆さんが苦労を重ねてこのグループリビングを作り、本当ならば中学校単位で出来ていくとどういう震災があってもみんなが困らなくて暮らしていけるんじゃないかという感じがしています。そこまで元気にみんなで頑張っていきたいと思っていますし、皆様に絶大な期待をしているわけです。これからさらに私達の力と行政の力と地域の力と一緒になって、どこまで市民力が発揮できるか試される時だと思います。どうぞ皆様、頑張って下さい。よろしくお願い致します。

３　登別市長　挨拶

登別市長　小笠原　春一様

皆様、こんにちは。只今ご紹介を頂きました、当登別市長の小笠原春一と申します。皆さんどうぞよろしくお願い致します。今日は「全国高齢者生き活きグループリビング」でのワークショップの開催をこの登別で開催していただきましたことを、心からお喜び、そして感謝を申し上げたいと思います。そして市内はもとより、全国各地から遠い中でこのように足を運んでいただきましたことにも心から感謝し、歓迎を申し上げたいと思います。本当にありがとうございます。

先程、最上理事長からもありましたが、3 月 12 日に開催予定でありましたワークショップが一旦延期という形になったということで、当時は残念に思っておりましたが、このように再度実現ができたこと、非常に私も嬉しく思います。そして、NPO 法人・COCO 湘南の最上理事長の熱い情熱がきっと、今日このワークショップの場でみなさんと共に熱い議論となって出てくるものと非常に期待を寄せているところでございます。被害があった時に、最上理事長からも非常に心温まるお心配りもいただきまして、非常に感銘を受けました。そして先程ご紹介にもありましたが、神奈川県海老名市とも姉妹都市ということですが、登別市と海老名市には大事な姉妹都市がもう 1 つありまして、それが宮城県の白石市でございます。皆様ご存じのとおり、地震によっての被害が非常に大きかったです。さらには登別の隣にあります白老町は宮城県仙台市と姉妹都市を結んでおり、宮城野区や若林区が災害に見舞われました。もう 1 つ登別の西にある伊達市は、山元町と亘理町、それと福島県に入って南相馬市のそばの新地町、すべて海岸沿いの街と姉妹都市になっておりまして、登別市を含めてこの界隈の街の姉妹都市はすべて大災害に見舞われました。3.11 東日本大震災以降、災害の支援ということで私達も当事者の身になって一生懸命支援をさせていただきました。今日お話をしていくであろう、高齢者の生き活きとした生活形態や環境づくりは被災地でも高齢者の方が大きな問題を抱えておりまして、どのようにこれから生活をしていったらいいのか、ただ単に高齢化が急速に進展して住まいの形態が多様化しているだけではなく、災害に強い街としてさらに皆様がすでに実現されているバリアフリーの形がこれからも求められていくのではないかと感じております。

皆様におかれましては、お互いの自主性を尊重した共同生活を通しての生涯自己実現を図りつつ、老いるという高齢者の生き活きとした環境づくりを、試行錯誤を重ねて今運営されていると思いますので、登別市としても今日のこの

結果を勉強させていただきたいと思います。それから先程、西條名誉理事長、最上理事長のお二方がおっしゃっておりました「市民力」という言葉ですが、私も市民の一人から、市内では初めて民間から市長ということで、常に市民力の結集ということを伝えさせていただいております。行政はある所までは出来ますが、それ以上のことはなかなか出来ません。やはりそこに住む地域住民の皆様の市民力が結集していなければ、いいまちづくりはできないと私も感じておりますので今日は実りある数時間であることを望みます。それともう一つ、今日出席されている「いぶりたすけ愛」の星川理事長が運営している「たすけ愛の家」、それと隣にあります「ともかな」をぜひ見ていっていただきたいと思います。「ともかな」はオープンしてまだ日が浅いんですが、ワンデイ・シェフがありまして、私も数度食べに行かせていただきました。本当に市民の皆様の熱意がその建物の中に入っているなと常に感銘を受けて、星川理事長を尊敬しているところでございます。ぜひ明日は楽しみにしていただければと思います。

それと最後になりますけれども、せっかく登別グランドホテルに来ていただいております。天皇陛下がお泊りになるホテルでございます。どうかこのグランドホテルも楽しんでいただき、何よりも登別温泉は９種類の泉質を誇る温泉と１日１万リットルも出る豊富なお湯によって支えられている街でございますので、一生懸命話をされた後にゆっくりとお風呂に入っていただいて、日ごろの疲れを癒して、また明日以降の英気を養っていただければなと思います。慶應大学の大江先生も来ていただいてますが、私どもも大学とのコラボレーションを大切にしたいと思っておりますので、もし今日をきっかけにチャンスがあれば登別市の行政ともお付き合いいただきたいと思います。最後になりますが、皆様の益々のご健勝とこれからのご活躍、そして今日全国各地から来られた関係機関・関係団体の益々のご発展をご祈念申し上げまして、簡単ではございますが、歓迎の挨拶に代えさせていただきたいと思います。本日の御盛会、誠におめでとうございます。

Ⅱ　ワークショップのねらい

大江 守之 氏
● 全国高齢者生き活きグループリビング支援事業委員長
● 慶應義塾大学総合政策学部教授

東京大学理学部・工学部卒業
国立社会保険・人口問題研究所人口構造研究部長を経て
1997 年より現職
博士（工学）
都市研究が専門

JKA の「高齢者生活共同運営住宅（通称：高齢者生き活きグループリビング）」補助事業は「お互いの自主性を尊重した共同生活を通じて生涯自己実現を図りつつ老いる」というコンセプトの下で運営されるグループリビングの先進性に着目し、その社会的普及を支援するために平成 17 年度に開始され、日本全国で現在 15 件の実績を持つにいたりました。

昨年度 JKA の委託調査で全てのグループリビングを訪問しましたが、それぞれの運営者が「自立と共生」という理念を実践に移す試行錯誤を重ねておられ、そこでの発見や悩みを共有することが必要であると思いました。

施設とは違う高専賃などの住まいが増えつつあり、同時に新しい住まい方を積極的に選択しようとする人が増えつつあります。そのような中で「高齢者生き活きグループリビング」の優位性は何かを考えてみると少人数の良さを活かした暮らしであり「自立と共生」を住まいの中や地域の中で促進し支援していくシステムではないだろうかと考えています。もう一度「高齢者生き活きグループリビング」の原点に立ち返り、「自立と共生」を実現する仕組みについて各 GL 運営者と議論していきたいと考えています。さらにグループリビング運営者同士やグループリビングに興味のある方々の交流の場にしたいと考えています。

１日目

理念「自立と共生」を住まいの中や地域の中でどのように実現しているかを広い視点から各講師にご講演いただいた後、講師から問題提起をしていただき、グループ別に議論していきます。このワークショップに参加いただくのはグループリビングを運営なさっている方が中心ですので、机上の空論ではない、生きた知恵を学び合う場となるでしょう。

２日目

午前中にＮＰＯ法人いぶりたすけ愛が運営する「いぶりたすけ愛の家」や開設前のコミュニティカフェをご見学いただきます。ＮＰＯ法人いぶりたすけ愛は地域に根差し、地域のニーズを実現している法人です。これまでのたすけあい事業や介護事業の経験を通してグループリビングのみならず地域の高齢者への支援を行っています。地域交流もサロン（アトリエ機能）で活発に行われています。どのように「自立と共生」を実現する運営しているのか、現地を見学しながら、運営者にお話していただきます。

Ⅲ　グループリビング論

高齢者生活共同運営住宅事業（JKA 補助グループリビング）の意義と展望

大江　守之

1　高齢者生活共同運営住宅事業の意義

1.1　高齢者生活共同運営住宅と COCO 湘南台モデル

JKA による「高齢者生活共同運営住宅（高齢者生き活きグループリビング）」補助事業は、NPO 法人 COCO 湘南が開設した高齢者グループリビング「COCO 湘南台」をモデルとして事業が組み立てられている。具体的には、住宅設計仕様における居室面積、共用部分の構成要素と面積などであり、また運営面での共同生活行為の範囲と支援方法、そのコスト負担の考え方などである。

今回、12 件の補助対象を詳細に調査した結果、全般的な入居率の低さや共用部分の利用率の低さなどから、COCO 湘南台モデルが十分に機能していない可能性が浮かび上がってきた。しかし、このことは「高齢者グループリビング」という暮らし方が社会的なニーズを持ち得ていないということ、あるいはその普及を支援する社会的意義が薄らいだことを意味するものではない。

COCO 湘南台はグループリビングに住みたいという人々が一つの運動として作り上げていったものであり、これをベースにしたモデルは、グループリビングに初めて取り組む事業主体が建物を建てて入居者を募集するという形式には必ずしも馴染まない側面があった。もちろん補助の仕組みをつくる段階で様々な検討はなされたが、今回の実態調査によって事前には予想できなかった問題点を発見することができ、同時に新しい事業主体の参入によってグループリビングの可能性を広げる新たな取り組みも見出すことができた。こうした点を踏まえ、プロトタイプ・モデルによる当該事業の成否を評価するだけでなく、高齢者グループリビング（高齢者生活共同運営住宅）の意義を再確認するとともに、社会的に普及させるモデルへの展開を図ることが必要であろう。

以下では、グループリビングの意義を再確認するとともに、補助事業の枠組みの改善によってグループリビングの社会的普及を継続することが望ましいという立場から、本調査研究を総括することにしたい。

1.2　高齢者グループリビングの意義の再確認

高齢者グループリビング・COCO 湘南台は、介護保険制度がスタートする以前から活動を開始し、この 10 年の介護保険制度の実績とこれに呼応して展開された高齢者住宅施策のなかで、その位置づけがより明確化されてきたと言ってよい。それは COCO 湘南台をモデ

ルとした高齢者生活共同運営住宅の位置づけが明確化されたということでもある。

高齢者グループリビングとは、一言で表現すると、「生活支援サービスを共同購入する高齢者の小規模集住形式」である。

高齢者の集住（共同居住）は介護保険制度の導入によって促進されてきた。集住の場は、介護保険制度における「施設介護」では介護老人福祉施設（具体的には特別養護老人ホーム）、介護老人保健施設、介護療養型医療施設の 3 種類が用意され、また「居宅介護」では特定施設入居者生活介護を行う場（特定施設）として有料老人ホーム、ケアハウス、高齢者専用賃貸住宅が、認知症高齢者共同生活介護（法改正によって地域密着型サービスに移行）を行う場としてグループホームが用意されている。これらはいずれも高齢者を集めて介護サービスを提供する集住形式であり、高齢者は介護サービスを提供する事業主体の管理下に置かれる。

一方、高齢者住宅施策における高齢者の集住促進は、当初バリアフリー住宅の供給拡大にウェイトがあったが、施設介護や準施設介護（特定施設入居者生活介護等）の供給が需要に追い付かないことや、介護が必要になるまでは賃貸住宅として住まい（必要に応じて食事サービス等を別途契約）、介護が必要になったときにそのまま安定的な介護サービスを受けたいというニーズに応えるために、介護保険法改正以降、高齢者専用賃貸住宅（高専賃）の供給促進が図られるようになった。高齢者住宅施策は介護保険制度との結びつきを強める方向に展開したと言えよう。

このように、高齢者の集住は、基本的に介護保険制度を前提としつつ安定した介護サービスを受けることを目的に組み立てられている。これに対し高齢者グループリビングは介護保険制度を前提とした集住ではなく、高齢期における一人暮らしの不安、コミュニケーション不足、食生活の質的低下等を防ぐことを通して生活基盤の安定を図り、一市民として社会に参加しながら暮らすことを目ざしている。NPO 法人 COCO 湘南は、これを「自立と共生」と表現し、高齢者グループリビングの理念としてきたのであり、高齢者生活共同運営住宅もこの理念に沿っている。

なお、高齢者グループリビングの居住者は、要介護状態になった場合には介護サービス事業者を選んで個々に契約し、自分の状況に合ったサービスを選択することができる。つまり一般の住宅に居住する場合と同様であるが、訪問サービスを受ける場合には、空間に余裕がありバリアフリー仕様になっているため、住み続けていた自宅よりも介護が受けやすい状況にあると言える。ライフサポーターの支援を組み込んでいるグループリビングであれば、家族が行うようなちょっとした手助けをしてもらうことができ、介護サービスは一層受けやすくなるだろう。

これまでの我が国の高齢者は「お世話される」存在であるという社会規範の中に置かれてきた。しかし、戦後に義務教育を受けた世代が高齢期を迎え、今後は戦後生まれが高齢期に入る時代となり、同時に大量の高齢者が都市的生活環境の中で暮らす状況が訪れることになると、高齢者の側にも「お世話される」ことに甘んずることなく社会参加を指向す

る動きが生じ、一方で社会もそれを歓迎する方向に変化していくだろう。これは社会全体における「脱施設化」の動向と呼応するものである。自分たちに必要なサービスを仲間と相談して選択し、共同購入することでコストを下げ、緩やかな共同性のもとで一方的に「お世話」されない「自立と共生」の暮らしを実現する高齢者グループリビングは、安定した生活基盤を伴う高齢期の暮らし方の一つのスタイルとして今後その意義は一層高まると考えられる。

2　高齢者生活共同運営住宅事業の展望

2.1　グループリビングの規模

既に述べたように、高齢者グループリビングとは「生活支援サービスを共同購入する高齢者の小規模集住形式」である。このポイントは「共同購入」にあり、居住者が話し合って意思決定を行い、それに基づいて食事づくりや清掃等のサービスを地域から購入するという点にある。もともと NPO 法人 COCO 湘南は居住者を正会員とし、そこに各分野の専門家が参加して成立した団体であり、住宅を一括借り上げし、ワーカーズ・コレクティブによる調理チームや清掃チームと個々に契約するという形で「共同購入」を実現した。

このように居住者が話し合って意思決定できる人数という観点から居住者は 10 人とされた。また、10 人のための調理ならば調理設備・調理器具や調理方法において家庭料理の延長上で対応可能であり、ワーカーズ・コレクティブによる主婦の労働力に頼ることが可能という判断もあった。

住居と生活支援サービスの提供という点において、グループリビングは高専賃（特定施設入居者生活介護を導入していない高専賃）と共通点を持っている。しかし、安定した食事提供やスタッフの常駐を可能にするために高専賃は一般に居室数が多い。その代表例に学研ココファンが経営するココファン・シリーズがあり、例えばココファン日吉は 81 戸から成る。規模が大きくなると食事サービスは業務用キッチン、専属の栄養士や調理師が必要になるが、ココファンではセントラルキッチン（集中調理施設）を活用するなど、コストを抑えながら質を確保する努力をしている。ただ、このような高専賃を供給できる運営主体は資金調達、スタッフ育成、マネジメント等から一定以上の規模の企業などに限られてくる。高齢者グループリビングは、こうした高専賃供給のビジネスモデルとは異なる形式で成立している手作りに近い住まい・暮らしのスタイルであり、どちらかがどちらかを包摂するという関係にはない。ファミリーレストランと町の小さなレストランとの相違をイメージすれば分かりやすいだろうか。両社は、食事をつくるシステムや市場規模が大きく異なるだけでなく、食事を作る側と客の関係、客同士の関係も異なる。良い悪いではなく、町の小さなレストランではそれらの関係が近く、また地域性や個性があらわれる。

現代社会は商品やサービスの提供において、主に企業がシステム化を通して質の確保とコストの低減を図りつつ市場を拡大しているが、それとは異なる仕組みも併存することが、

人々の選択肢を増やす上で望ましい。特に、サービス提供に関連して共同性や親密性が重要なファクターとなる分野－高齢者居住はまさにこの分野－においては、高度にシステム化されていない仕組みの存在が重要である。

2.2　運営主体

COCO 湘南台モデルは、入居予定者が開設準備に関与し、意思決定に参加することを前提としたモデルである。そのなかで、NPO 法人 COCO 湘南が入居者の意思をまとめ、それをもとに「生活支援サービスの共同購入」を行う契約主体となる。このため、入居者の入れ替わりはあっても、新しい入居者は意思決定に参加することがしやすい仕組みになっている。しかし、JKA の補助事業で整備されるグループリビングの多くは、住宅を建設し、入居者の募集をかける形になるため、最初から提供するサービスの供給体制を整えておかなければならない。入居希望者がグループリビングの理念や日々の暮らしのあり方を十分に理解していることも期待しにくいため、「生活支援サービスの共同購入」は入居者が生活に慣れた段階から少しずつ修正していくことが必要になる。それでも入居者が意思決定に加わることに対して同じような意識を持つには時間がかかることが十分想定され、運営主体のコーディネート力が必要とされるだろう。

JKA の過去の報告書では、コーディネータを入居者から選び、サービス購入の契約者になることを望ましい形として提示している。これは理想の一つではあっても現実的には困難な選択肢であり、実体をともなう形でこの契約形態を採用しているケースはない。実際には運営主体（補助金交付団体）のスタッフがコーディネートせざるを得ない。12 件を調査した結果をみると、地域的な差異や入居している高齢者自身の行動規範などに左右されることもあり、安易に成功か否かを判断することには慎重でなければならないが、今回の調査以前の訪問調査の経緯も踏まえて、入居率の高さの他に、入居者や運営スタッフが作り出す場の空気といった参与観察からしか得られない情報も加味すると、助け合い活動等の地域での活動経験の長い NPO の運営が比較的円滑であると判断できる。社会福祉法人は制度に基づくサービス供給になれており、手堅い側面はあるものの、入居者の意思決定への参加という場面の経験は少ないように思われる。

地域活動の経験の長い NPO は、地域でのネットワークが力を発揮し、入居希望者募集に際しても、また様々な雇用形態を持つスタッフ集めに関しても比較優位性がある。今後、補助事業を継続する場合には、こうした地域活動の経験を有する NPO を積極的に支援することが社会の中に新しいセクターを育成していくという点においても望ましい。それは財政基盤の弱い NPO が高齢者グループリビングの運営を通して活動基盤を強固にし、地域への貢献が強化されるという効果が期待できるからである。

2.3　共用部分の仕様と運営方法

高齢者グループリビングは、共同生活空間が居住者の共同生活行為を受け止め、コミュ

ニケーションを豊かにし、生きる意欲の向上を通して生活の豊かさを実現する仕組みでもある。したがって共同生活空間をどのように用意するかは極めて重要な問題である。

共同生活空間、すなわち共用部分は広ければ豊かさを感じるとは一概に言えない。広ければその分建設費やランニングコストの負担も増える。逆に、面積を抑えても設計の仕方によっては空間的な豊かさは十分に実現可能でもある。現在の補助事業は COCO 湘南台モデルがベースにあるために、共用部分がかなりの面積を有する形になっている。特に「アトリエ」と呼ばれる空間は、COCO 湘南台では明確な理由があって存在するものであるが、補助を受けてアトリエを整備した運営主体の中には有効に利用できていないケースも少なからず見受けられる。

アトリエは地域との交流を目的とするものであり、日常的に利用されるためには、予約、利用料徴収、掃除などの業務が発生すために、スタッフの存在なしに利用が活発化するものではない。一つの提案としてアトリエをコミュニティ・カフェとし、昼間の時間はスタッフが常駐する形にして、居住者も気軽に利用できかつ地域の人々との面識縁（顔見知りの関係）が自然にできるようにしていくことが考えられる。コミュニティ・カフェの事例は数多くあり、補助対象の中でもこうした考えに賛同する運営者も存在する。また、コミュニティ・カフェは上記のようにグループリビングを地域に開く機能を持ち、グループリビングをつくることが地域力を強化することにつながり、その公益性が一層明確になる。

2.4　契約形態

COCO 湘南台モデルは、入居者が NPO の正会員になり、NPO の意思決定に参加する資格を担保した上で、NPO という法人が家主や生活支援サービス供給主体と契約するモデルである。しかし、JKA 補助事業はグループリビング運営主体に対して建設費等補助を行うため、入居者が個々に運営主体と居住契約と生活支援サービス提供契約を一体のものとして結ぶケースが出てきやすい。介護保険法改正以降、都道府県の指導に差はあるものの、この形式は有料老人ホーム扱いになる。有料老人ホームの規定を改正したのは、行政が「老人下宿」などとも呼ばれる粗悪な高齢者への住まいとサービスの一体的供給形態を把握し、必要な是正措置をとることができるようにするためであった。

最近の補助事業では有料老人ホーム登録を選んだ事例も出てきており、有料老人ホームの形式をとりながら、実質的に入居者の意思決定を尊重する運営に取り組めばよいという考え方も成立する。しかし、高齢者グループリビングは、理念的にも有料老人ホームとは異なるものであり、現在の高専賃制度に沿う形で住宅の賃貸借契約とサービス提供契約を独立させることが望ましい。高専賃制度も改正にむけて検討中であり、現在ある高齢者の住宅制度が「サービス付高齢者住宅」に統一される方向が出されている。制度的な位置づけの面からの安定性を得る上では、この新しい高齢者住宅制度に沿うことが必要になると思われる。

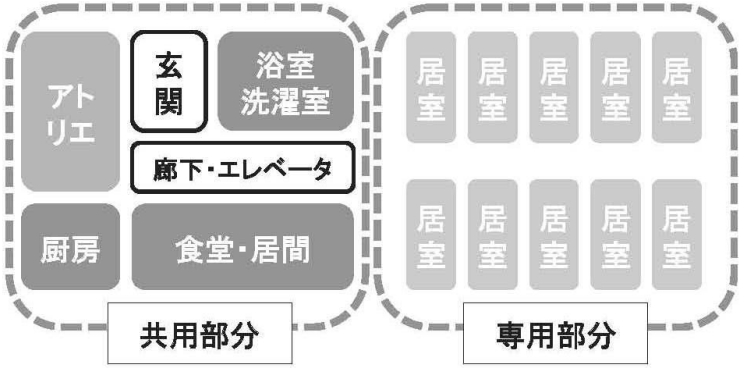
高齢者生活共同運営住宅（高齢者生き活きグループリビング）の特徴

基本的性格

●生活支援サービスを地域から共同購入する高齢者の小規模集住形式
●介護サービスを受けるための集住ではなく、一人暮らしの不安の解消、バランスのとれた食生活等を通して生活基盤の安定を図り、入居者が地域住民の一人として生活することを支援する仕組み
● 助け合い活動等の地域での活動経験の長い団体が運営している事例では、グループリビングへの取り組みが活動拠点の確保や経営基盤の強化につながり、10人の高齢者への住まいの提供と生活支援を超えて、地域住民へのケアサービス展開や雇用拡大に結びついている

アトリエ

●地域との交流スペース
●利用方法は各所で工夫
●コミュニティカフェの試みがあり、今後に示唆的
●カフェはスタッフが常駐でき、気軽に人々が集まる地域のつながりの拠点になっている



居室

● 面積25㎡、洗面、トイレ、ミニキッチンを備えた質の高い居室
○家賃負担を考えると、高齢者専用賃貸住宅の規定に合わせて18㎡以上とすることも一案

食堂・厨房

●主婦などがワーカーズ等に加わって調理を担当
●10人分の調理であるため、家庭の厨房設備と主婦のスキルで対応でき、家庭的な料理を味わえる
●地域の雇用を生み出しており、食材も地域で調達
●食事づくりのワーカーズ等が地域の配食活動等に取り組む事例があり、コミュニティ形成に寄与

共用部分全般

●10人の共同生活行為を受け止める空間
●使い方のルールは基本的に居住者間で決め、清掃等の管理はワーカーズ等に委託
○共用部分の面積は賃料やランニングコストとの関係で、各グループリビングの選択の自由度があってよい
○利用度をあげるために冬季の効率的暖房設備が必要

（○ は検討課題）

Ⅳ　講演

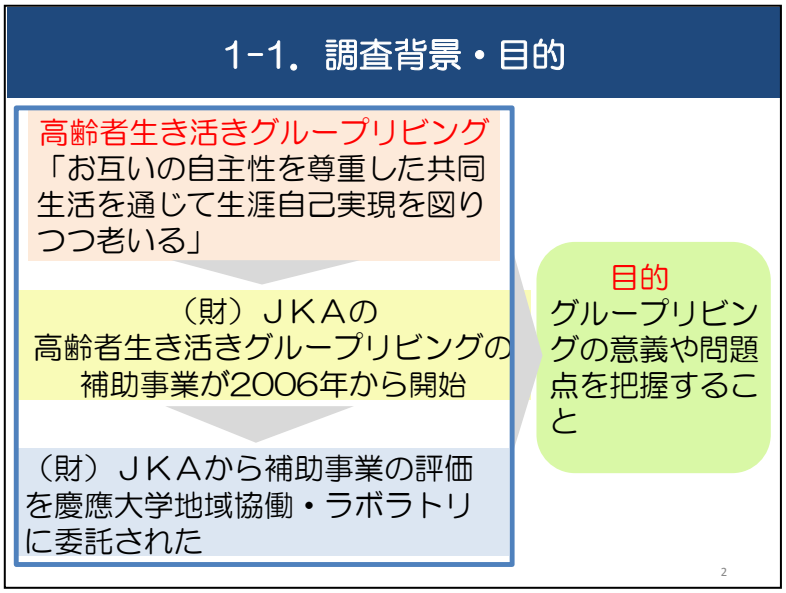
1　「全国高齢者生き活きグループリビング」の実態把握に関わる調査報告

―「自立と共生」理念と実現のための支援―

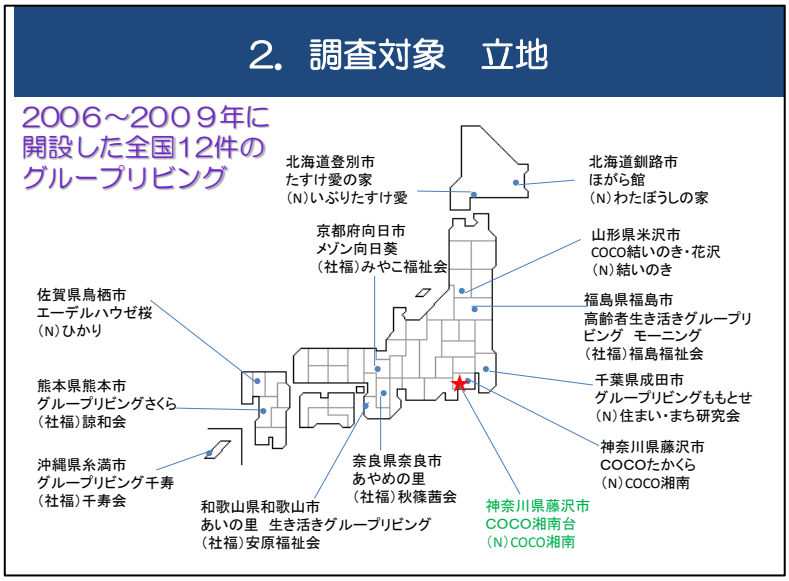
土井原　奈津江 氏
- 全国高齢者生き活きグループリビング支援事業委員
- 慶應義塾大学 SFC 研究所 上席所員（訪問）

1 級建築士・福祉住環境コーディネーター
鹿島建設株式会社建築設計本部を経て
慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科
後期博士課程在学中

高齢者生き活きグループリビングの実態把握に関する調査報告を発表します。ワークショップのテーマは「自立と共生」　理念と実現のための支援です。テーマに沿った内容を調査報告の中から抜き出し、発表を行いたいと思います。



まず最初に調査の背景と目的についてお話します。（財）ＪＫＡは COCO 湘南台の目指す「自立と共生」の住まい方は意義があると評価し、2006 年からグループリビングの建設に補助を始めました。JKA は 2009 年末に 4 年経ったこの補助事業を評価することが必要と考え、これまで出来たグループリビングの調査を慶應大学・地域協働ラボラトリに委託されたのがこの調査の契機です。調査の目的はＪＫＡ補助で出来たグループリビングの事業の意義や問題点を把握することです。これらの実態調査のなかでサポート体制に焦点を当てて発表したいと思います。



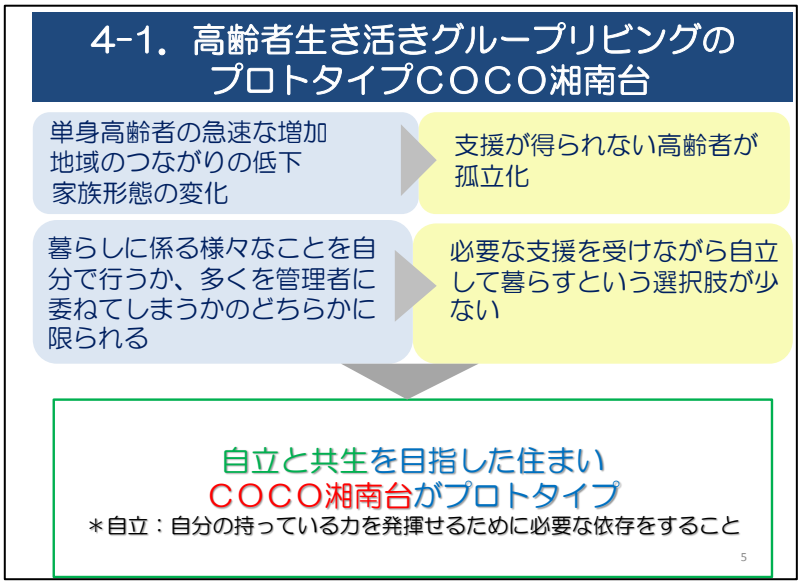
次に調査対象の立地を図に示しました。調査対象は 2006 年から 2009 年までにＪＫＡ補助で出来たグループリビング 12 件です。沖縄から北海道まで全国にあります。★印はこの事業のプロトタイプとなった COCO 湘南台を示しています。事業主体の内訳は社会福祉法人、NPO 法人ともに 6 件でした。

3．調査の方法

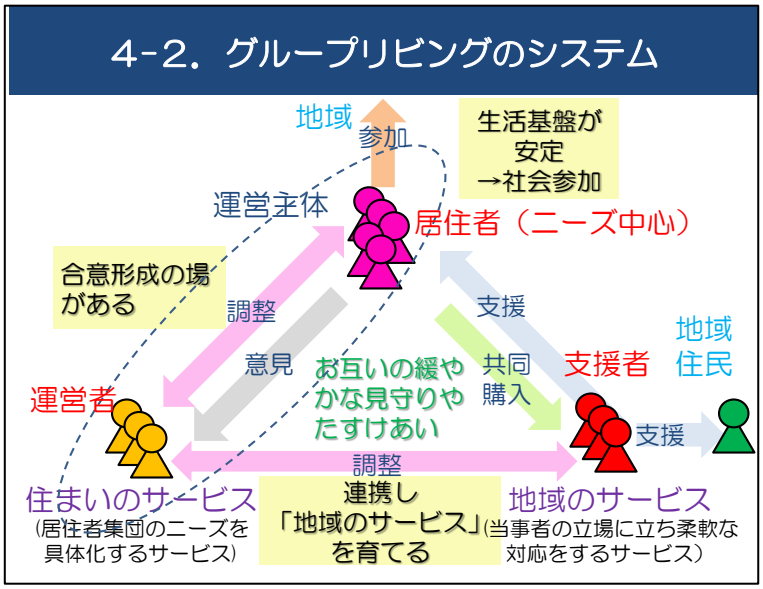
調査期間　2010年1月～3月
調査対象者　グループリビング運営者

研究対象	システム	形態	文献調査	資料調査	設計図書	アンケート	インタビュー
ＪＫＡ補助のグループリビング12件	住まいのサービス	運営	○	○		○	○
		支援	○	○		○	○
		居住			○		○
	地域のサービス	運営	○	○		○	○
		支援	○	○		○	○

次に調査方法です。調査期間は 2010 年 1 月から 3 月です。調査対象はグループリビング運営者です。グループリビング事業者や支援事業者に対し、運営、支援、居住について文献、資料、設計図書、アンケートで調査するとともに、現地にてグループリビング運営者に 2～3 時間のインタビューを行いました。



高齢者生き活きグループリビング事業のモデルとなった COCO 湘南台についてご説明します。COCO 湘南台は NPO 法人 COCO 湘南が運営しています。COCO 湘南台は高齢者の暮らしに問題意識を持った市民が市民力で作った住まいです。地域の中では単身高齢者の増加、地域の繋がりの低下、家族形態の変化によって、家族からの支援が期待できない高齢者が孤立化しています。高齢期の暮らしは暮らしに関わる様々なことを自分で行うか、多くを管理者に委ねてしまうかのどちらかに限られその中間的な必要な支援を受けながら自立して暮らすという選択枝が少ないのが現状です。このような問題を解決しようと作られたのが COCO 湘南台です。当事者を含む様々な専門家が集まり、3 年間じっくり話し合いを行った結果、「自立と共生」を目指した住まいを開設させました。 COCO 湘南の定義する「自立」とは「1 人の人間として自己選択、自己決定し、人の自己決定も尊重すること。」です。ここでの自立は一般的に使われる食物摂取の行為や歩行、着脱などが出来ることではありません。逆にいえば身体的な自立はできなくても最期まで自己決定できれば「自立」として考えています。また「共生」とは地域住民として地域の中で協働していくこと。住まいに運営参加することや生活者同士が助け合うことです。自立とは「自分の持っている力を発揮せるために必要な依存をすること」ともいえます。「必要な依存をする」ためには当事者のニーズに応えることができる「共生」の環境が必要、ということになります。



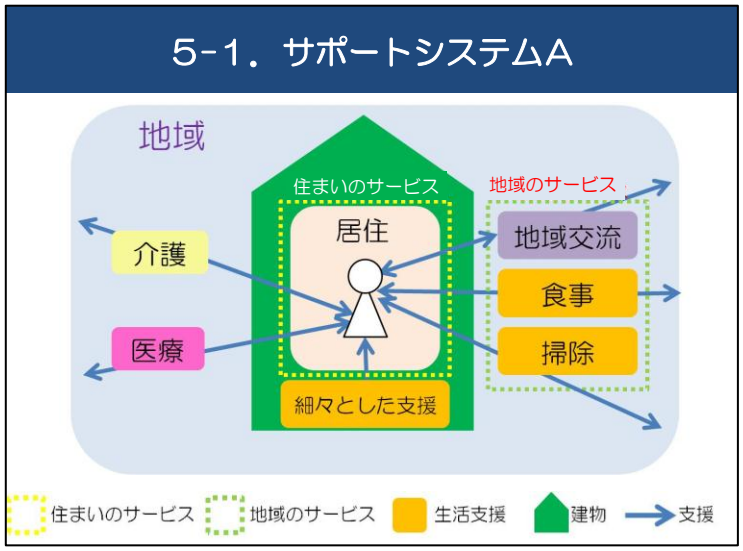
プロトタイプの COCO 湘南台のサポートシステムについて説明します。グループリビングの運営主体は運営者と居住者です。住まいの中には居住者の合意形成の場があり、居住者のニーズを中心に暮らしを組み立てます。ニーズには色々な定義がありますがここでいうニーズとは「自らがこうなりたいという現実を構想する時に初めてあるべき現実とのギャップのなかに発生するもの」です。ニーズは「あなたはこうあるべき」と他人から強いられるものではありません。ニーズには自分で認識できるものと自分で認識できないものがあります。これらのニーズをくみ取り、そのニーズを実際のサービス内容やコストなどへと具体化していく調整者が住まいのなかに必要になってきます。それをここでは「住まいのサービス」と定義します。さらに具体化されたサービスを実際に行うには調整者と協働し、当事者主体のサービスを柔軟に提供する支援者が地域の中に必要です。このような支援者が提供するサービスを「地域のサービス」と定義しました。この「地域のサービス」はグループリビングだけではなく地域住民に対しても当事者主体のサービスを提供します。このようなサービスを基盤としているグループリビングの基本的性格は「生活サービスを地域から共同購入する高齢者の小規模集住形式」であり「介護が目的の集住ではなく一人暮らしの不安の解消、バランスのとれた食生活等を通して生活基盤の安定を図り、居住者が地域住民の一人として生活することを支援する仕組み」と言えます。

4-3. 住まいのサービス

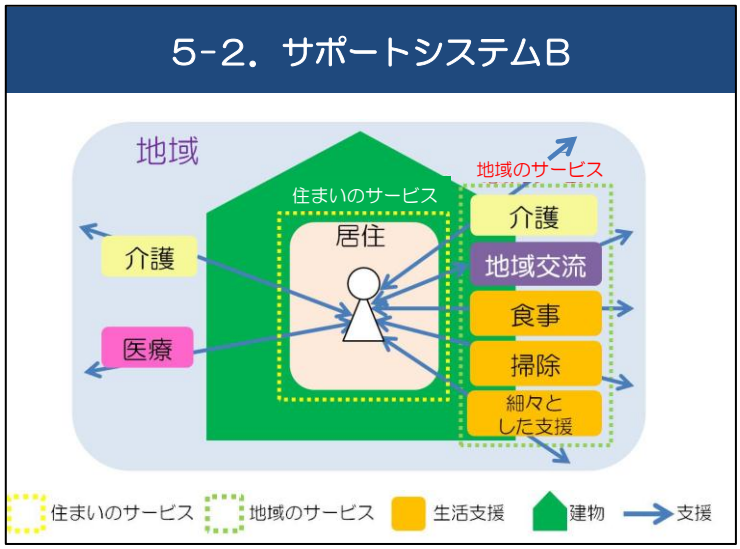
当事者の持っている力を発揮させる ▶ 当事者が必要な依存をすることを支援し、柔軟な対応をする

ニーズの主体	ニーズを挙げる場	ニーズの調整、具体化	ニーズの支援主体
居住者集団	合意形成の場	「住まいのサービス」調整者	「地域のサービス」事業者 or「住まいのサービス」スタッフ or居住者同士 orその他
居住者個人	個別の場		

次に当事者の持っている力を発揮させ、当事者が必要な依存をすることを支援し、柔軟な対応をする「住まいのサービス」について説明します。この役割はグループリビングの運営主体が担うものです。表は「住まいのサービス」の概要を示しています。グループリビングのニーズの主体は居住者集団、居住者個人の２つがあります。居住者集団のニーズを汲み取るためには合意形成の場が必要です。合意形成の場とはたとえばＣＯＣＯ湘南では居住者ミーティングや運営会議など、居住者が様々な場面で発言しそれをまとめる場があります。また居住者個人のニーズを汲み取るためには個別の相談や話し合いの場が必要になります。ニーズを調整し具体化するのは「住まいのサービス」です。またその支援を実現するニーズの支援主体は「地域のサービス」や「住まいのサービス」、それぞれの居住者などです。グループリビングの居住者集団、または各居住者は加齢や心身状況の変化に伴い状況は一定ではありません。状況に応じたサービスを柔軟に作っていくことが居住者の生活の質をあげていくことに繋がります。

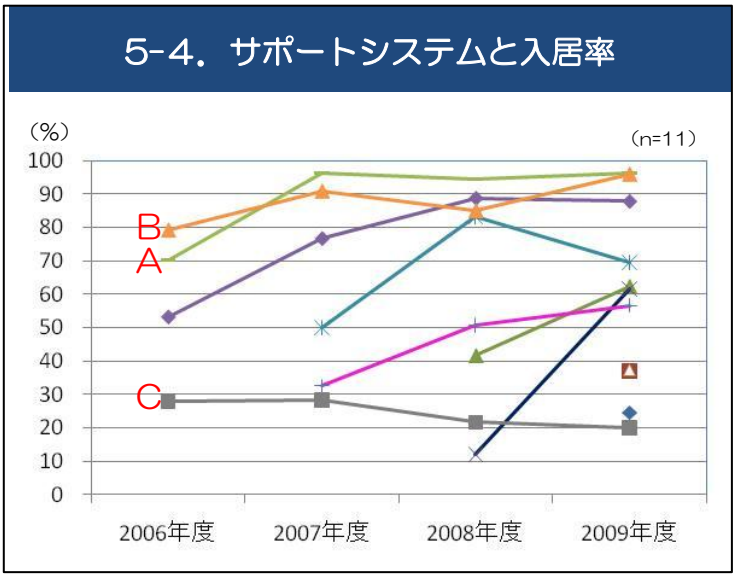


次に調査対象の 12 のグループリビングの中から 3 つの特徴的なサポートシステムを取り出しモデル化しました。まず最初にサポートシステム A についてご説明します。ほとんどの支援は外部委託で「地域のサービス」事業者から調達しています。これらの事業者は GL だけでなく地域住民にも支援をしています。このシステムの母体のグループリビングの運営者は GL 開設前に地域の中に「地域のサービス」がなかったのでこれを生み育てました。育てられた「地域のサービス」は地域住民に対して当事者主体のサービスを行っています。外部からの支援によって生活基盤ができた居住者は地域活動に参加しています。



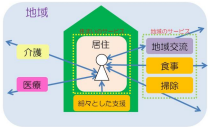
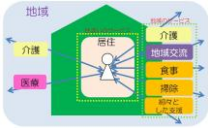
次にサポートシステム B について説明します。これは助け合い活動を通して介護や生活支援などの既存事業を持つ事業者のサポートシステムです。もともと助け合い活動をして

いたので当事者主体の「地域のサービス」の基盤を持っていました。GL の開設に伴い既存事業をグループリビングに併設し、活動拠点を確保し、経営基盤を強化してきました。既存事業を併設することは日中住まいに人がいることで居住者の安心につながります。また支援距離が近いことで兼務が可能になり経済的です。グループリビングを開設し経営基盤が強化したことで地域の中で新たな助け合い活動を生みだしています。



続いて入居率を図に示しました。入居率だけでグループリビングの意義を評価することは意味がないことは前置きをさせて頂きます。開設年数が浅いということやグループリビングという暮らし方を知らない人も多いため、入居率は低いところが多いです。しかしほとんどのグループリビングの入居率は年々上昇しています。サポートシステム A,B はいずれも入居率は高く入居待ちを抱えています。また開設時の入居率も高いです。一方入居率が低いのはサポートシステム C でした。A、B は地域住民に対して行っている「地域のサービス」を通して、住まいのなかのサービスを察することができ、安心であるため入居率が高く、一方Cは「地域のサービス」がないため、地域住民にとって住まいの中でどのようなサービスが行われているのかが分かりにくいと考えられます。「地域のサービス」があることは居住者や地域住民にとって安心安全であり地域の信頼を得やすいと考えられます。

６．まとめ

サポートシステム		評価
A		○サービス供給側を外部化→当事者性を明確化 ○「住まいのサービス」や地域のなかに「地域のサービス」がない場合→自分たちで作り育てる→開発期間が必要→立ち上げに時間がかかる。 ○ 「地域のサービス」を育てる→地域貢献
B		○地域との関係性→当事者性を明確化 ○既に「地域のサービス」がある→立ち上げに時間がかからない。 ○制度にとらわれないグループリビングをもつ→経営基盤や運営が安定 ○ 「地域のサービス」を運営 →地域貢献
C		○生活機能を内部化→当事者性を明確化できない。 →意図的に他者を作らないと管理者主体の供給体制になる可能性がある。 ○地域とのつながりが薄く閉鎖的

次にＡＢＣの３つのサポートシステムの評価を表にまとめました。　まず当事者性については最も強いのはサービス供給側を外部化している A です。内部にサービス供給をもつ B は地域との関連性の中で当事者性を明確化できます。当事者性が最も低いのはサービス供給側を内部化している C です。当事者主体ではなく供給側主体となる可能性が大きいと考えられます。意図的に他者を作ることが必要です。次に GL 開設の準備期間の長さについては B はもともと「地域のサービス」を持っているので準備に時間がかかりません。A のように地域の中に連携できる「地域のサービス」が開設前にない場合、「地域のサービス」 を生み育てなくてはなりません。また住まいのなかで当事者のニーズに対応する「住まいのサービス」をどのように実現するかを開設までに考えないといけないので時間を要します。地域貢献について、A は「地域のサービス」 を作り育て間接的に支援を行っています、B は「地域のサービス」 を既存事業としているため、地域に対し貢献しています。ＡＢは住まいのなかだけではなく地域に対して支援を行っているため、地域への貢献ができ公益性があります。しかし C は住まいが閉じており、地域との関係がないために地域貢献は期待できないと考えられます。

「自立と共生」の実現という点では「住まいのサービス」「地域のサービス」を持っている AB は実現の可能性がありますが「住まいのサービス」「地域のサービス」を持たない C には難しいと考えられます。

7．課題

少人数の暮らし	グループリビングの少人数の暮らしは居住者、スタッフ、地域にとって何が優位性で何が問題点なのか。
支援の関係性	「自立するには共生が必要」である。これまでの一方的な支援ではない関係を運営主体、スタッフ、居住者においてどのように実現しているか、また実現させればいいか
地域の自立と共生	グループリビングが居住者のみならず地域のために「自立と共生」を普及させることをどのように実現しているか、または実現すればいいのか。

最後に今後の課題について述べます。この調査でみえてきたことはグループリビングの意義は当事者のニーズを具体化していくシステムを持つことです。しかし居住者集団のニーズをまとめることは大勢の住まいでは難しく 10 人という少人数の住まいだからこそ可能だと考えられます。このように少人数の暮らしの優位性や問題点について考えることが必要です。また「自立するためには共生が必要」ですがこれまでの「お世話する側、される側」といった一方的な関係ではない双方向の関係性がこれからは求められます。これをグループリビングに関わる運営主体、スタッフ、居住者がどのように実現しているか、または実現していけばいいのかを考えることはグループリビングの今後の運営に役に立つのではないかと考えられます。そして住まいのなかだけでなく地域のなかに当事者主体の「自立と共生」が普及すれば地域住民が安心して暮らすことが出来ます。グループリビングが「自立と共生」の活動をどのように実現しているか、または実現させればいいかを考えることはグループリビングの公益性を明らかにし普及につながります。地域の中に当事者性を重視した「自立と共生」の活動が広がれば地域の中のさまざまな問題が解決され、支援の質が上がります。グループリビングの存在価値を住まいだけではなく、地域へと広げていくことがグループリビングの普及と安心な社会への実現につながっていくと考えています。発表は以上です。御清聴ありがとうございました。

２　グループリビング実態報告

１．たすけ愛の家

星川 光子 氏

● NPO法人
いぶりたすけ愛　理事長

社会福祉士
1994年　さわやか福祉財団リーダー研修会受講
1995年　登別ライフケアを考える会発会（現 いぶりたすけ愛）
1999年　NPO法人格取得　現在にいたる
2006年　グループリビングたすけ愛の家を開設

グループリビング「たすけ愛の家」の歌

作詞　宮崎　喜一
曲　「函館の女」のメロディで

一．北海道は　登別
グループリビング　たすけ愛
一人暮らしの　老人が
肩寄せ合って　暮らしているよ
桜木町の　三丁目
ここが我らの　夢の家だよ

二．自由な暮らし　楽しいよ
サロンも色々　みんな来る
カラオケ、麻雀、囲碁、パソコン
俳句、短歌や　歌声喫茶
みんな生き活き　笑ってる
ここが我らの　夢の家だよ

三．一人の部屋は　十五畳
気ままな暮らし　しています
朝は各自で　料理して
昼と晩には　家族のように
皆で食べれば　なお美味し
ここが我らの　夢の家だよ

登別にようこそお越しいただきまして、本当にありがとうございます。実はGLに住んでいらっしゃる88歳の方が、いぶりたすけ愛の家の歌を作詞したんですね。北島三郎の「函館の女(ひと)」の歌詞に合わせてみんなで歌っているんです。明日生演奏を発表します。このパワーポイントも見ていただけたらなと思って、これに載せてつたない発表をしたほうがいいかなと思って、写真を楽しんでもらえたらなと思っております。

北海道は登別

総人口 52037人

高齢化率 28.2%

グループリビング　たすけ愛

「北海道は登別」ということで、登別の総人口は 52,037 人と、どんどん減っているという状態です。高齢化率は 28.2%と高いと思います。登別は登別温泉と、室蘭と隣接しておりまして、室蘭は工業地帯なのですが、新日鉄や日鋼の住宅地になっているのが登別なのかなと思っております。写真は発表する機会があったもので、プロの録音の方、プロのピアノの方をお願いしてＣＤを作ったのですが、なかなか合わせるのが大変で今日はそれを発表するのはやめようと思いまして、明日はアカペラで歌う予定にしています。

ひとり暮らしの老人が

肩寄せ合って　暮らしているよ

登別の豊水祭りという地域のお祭りがありまして、そこの子供広場に生活者の方達とみんなでお手伝いに行った時の写真です。「肩寄せあって暮らしているよ」ということで、Ｖサインをしている方がうちの最高齢の 96 歳のおばあちゃんなのですが、いま入院されております。上にエプロンをつけている方たちが配食を担当して下さっている方達で、料理の得意な方達が 10 人ぐらい入れ替わり立ち代わり、台所で得意な料理を発揮していただいて、GL の方達、サロンに来られる方の食事と、配食を担当してくれております。この赤ちゃんは子育て中の方が遊びに来た時の写真です。

ここがわれらの　夢の家だよ

桜木町の　３丁目

「桜木町の３丁目」ということなのですが、昨日も(ほがら館の)佐々木さんがうちの GL に泊まっていただいて「随分変わったね」と感心して下さいました。もともと広い原っぱだったのですが、それが今ではたすけ愛の隣に「ともかな」が出来て、その隣には内科が出来て、向かいには大型スーパーになっております。郵便局もすぐ近くですし、コンビニもすぐ近くにあります。近くには幌別川が流れており、鮭も上ってきて、白鳥も来るというとても環境の良いところです。写真は登別 NPO ネットといいまして、登別の NPO が７団体、連携してやっているのですが、懇親会の写真です。

これも子育て中のお母さんが遊びに来てもいいですかということで来たときの写真で、みなさん大変喜んでおります。お子さんたちの面倒を見たり、お母さんたちは自分たちのやりたいちぎり絵をやったりした時の写真です。

自由な暮らし　楽しいよ

サロンもいろいろ　みんな来る

「自由な暮らし楽しいよ」ということで、餅つきの写真なのですが、みなさん餅を丸めるのが大変得意で、上手にやっておりました。

「サロンもいろいろ」ということで、写真はボランティア団体の方達が来てくださって、歌を披露してくださいました。住んでいる方達が「ただ聞くだけじゃ面白くないわよ、私たちも何かやりたいわよ」ということで急遽コーラスグループを作りまして、ひまわりをつけて歌を披露したという写真です。「カラオケ・マージャン・囲碁・パソコン」と、いぶりたすけ愛ではやっている事業がもともとは在宅サービスが発端です。発会した当時は介

護保険事業もなく、在宅でいる方が困っておりまして、私たちも介護される時、こんな状態では困るというので主婦何人かが立ち上がった会なんです。

カラオケ　麻雀　囲碁　パソコン

俳句　短歌や　歌声喫茶

「カラオケ・マージャン・囲碁・パソコン」と、いぶりたすけ愛ではやっている事業がもともとは在宅サービスが発端です。発会した当時は介護保険事業もなく、在宅でいる方が困っておりまして、私たちも介護される時、こんな状態では困るというので主婦何人かが立ち上がった会なんです。次に介護保険事業がはじまりました。広い場所を借りられたので、サロンを始めておりまして会員さんに「１つの部屋を開放します。みなさんどうぞ、自由に使ってください」と提案しましたら、やりたいことを決めてやりましょうということで使って下さっているのですが、カラオケ、マージャン、囲碁をやりたい、パソコンを教えたいという方がやって下さっております。写真はカラオケとマージャンをやっているところです。

「俳句・短歌、歌声喫茶」もあるのですが、俳句は GL に住んでいる 94 歳のおじいちゃんが独学で俳句を一所懸命学んできておりまして、GL に住むようになって 300 ぐらい俳句を作っているんです。本人が「もっと俳句を勉強したい。誰か先生来てくれないだろうか」という申し出がありまして、たまたま知っている俳句の先生に頼みまして、月１回来て頂いております。94 歳の方も賞を獲ったり他の方も賞を獲ったりと進歩してきて、楽しくやっております。

みんないきいき笑ってる

ここがわれらの　夢の家だよ

「みんないきいき笑ってる」ひとり違う方がいますが…、前の方が住んでいる方です。

「ここがわれらの夢の家だよ」支笏湖に行った時の写真なのですが、誕生会は出来るだ

けみんなで出かけるようにしております。この時は、入居者が「おじいちゃんといった思い出の支笏湖に行ってみたい」とおっしゃったので、みんなで支笏湖に行こうということで出かけました。

一人の部屋は　15畳

きままな暮らし　しています

「ひとりの部屋は 15 畳」JKA のところは 15 畳だと思いますが、ミニキッチン、洗面台、トイレ、クローゼットがついております。

「気ままな暮らししています」打ち合わせの写真なのですが、週に１回、今は木曜５時に集まっておりまして、誕生会どうしようか、食事のほうはどう、暮らしに問題はないか、という話をしております。

朝は各自で　料理して

昼と晩には　家族のように

「朝は各自で料理して」うちは朝ごはんがありません。昼と夜はみんなで食べるようにしております。料理の好きな方は、朝からきっちり食事を作ってみんなに配る方もいれば、全然何もしたくないわ、朝はパンでいいわ、前の日の残ったものをとっておく方もおりまして、いろいろな生活をしております。

「昼と晩には家族のように」サロンの方たちもお昼は一緒に食べますので、楽しく食べております。

皆で食べれば　なお　おいし

ここが我らの　夢の家だよ

「みんなで食べれば尚おいしい」毎日介護賞の…私達は特別賞で、大賞の方がそこにいらっしゃるのでちょっとあれなのですが(笑)、その時のお祝いの写真です。これが私達のGLの写真です。

高齢者・障がい者らによる社会起業家集団「ともかな」が地域を変える！

私達のGLの隣に「ともかな」というものが建っています。“高齢者と障害者らによる社会起業家集団「ともかな」が地域を変える”という夢か妄想かと笑われたような題なのですけれども。高齢でも障害でも特技や知識を活かして、いろんな方が活躍できる場であってほしいと思っております。

子育ての団体が１つ出来ておりますし、ものづくりの方が６人ぐらいいろんなものを作ったり、販売したりしております。カフェの方は先ほど登別市長が言って下さいましたけれども「ワンデイシェフ」というのをやっておりまして、その日によって、作って下さる方が代わるのですが、高齢者だったり、障害者だったり、若い方もいらっしゃって、またその方同士が助け合って、作っているという楽しい所になっております。

隣に写っているのが駄菓子屋なんですが、駄菓子屋が一番人気で、GLの方達がオーナーになっております。自治会費を毎月3,000円集めているのですが、結構使い切れずに溜まってきているんですね。皆さんどうしようかということで「儲けは無くてもいいから、駄菓子屋をしよう、子供たちに喜んでもらおう」ということでしているのですが、結構一番の人気なのではないかと思っております。

小規模の暮らしの優位性と問題点

優位性

- **居住者**
  主体的にその人らしい暮らしができる
  家族的・仲間意識がある
- **スタッフ**
  たすけあう仲間意識
- **地域**
  家族や制度に過度に頼り切らない暮らし→経済的効果
  意識の変革→自立と共生

問題点

- **居住者**
  神経質な人、依存的な人には合わない（マイペースの人には最高！）
- **スタッフ**
  波乱万丈の毎日
- **地域**
  災害時の地域との連携

次に私の問題提起をしなければならないのですが、小規模の暮らしの優位性と問題点……これに関しては、考えるたびに私は変わってしまうので、皆様も検討して頂けたらと思うのですけれども、優位性は居住者にとっては、主体的にその人らしい暮らしができるのが一番かなと思います。家族的に仲間意識があるということですね。スタッフにとっても、うちは本当にお互い助け合いましょうということでやっている会ですので、助け合う仲間意識があると思います。地域にとっては、家族や制度に過度に頼りきらない暮らしということで、経済的効果、意識の変革、自立と共生、新たな暮らし方ということを地域に伝えていけるのかなと思っております。ミーティングでも私達は先駆的な事業をしているので、この暮らしを地域に広げていきましょうということは常に話し合っております。

問題点は居住者にとって誰もがこの暮らしに合うわけではないということを、うちも出入りがあったもので思っております。あまりに神経質、依存的な人には合わないと思います。マイペースな人には最高だと思うのですが、本当に。今暮らしている方はマイペースにやっている方だなと思っております。スタッフにとっては、波乱万丈の毎日と書いたのですが、少人数でよく分かりますので、喜びも 10 倍なら悲しみも 10 倍というところがありまして、この間も５月にひとり見送ったのですが、自分の親を見送ったような悲しい、落ち込んでしまう自分がいるのを感じております。地域の問題点というのはすごい悩んだのですが、今回の大震災もありましたので、災害時に地域との連携をもっと強めなければならないことが問題なのかなと思っております。

以上です。つたない発表でしたが、明日見ていただけたら、きっともっとよく分かっていただけると思いますので、どうぞよろしくお願い致します。ありがとうございました。

２．グループリビングほがら館

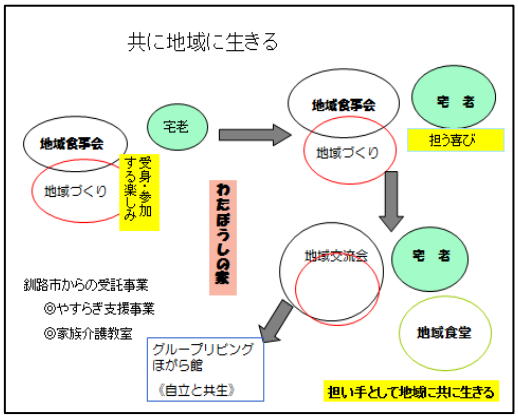
佐々木 幸子氏

● ＮＰＯ法人わたぼうしの家　会長
　グループホームさんぽみち　ホーム長

専門資格：介護福祉士・介護支援専門員・認知症介護指導者
2000年　わたぼうしの家設立・地域づくり開始・宅老開始
2001年　認知症対応型通所介護開所
2003年　認知症対応型共同生活介護
2004年　地域食堂開所
2007年　グループリビングほがら館開所

NPO法人わたぼうしの家
事　業　内　容

2000年8月
　グループホーム建築に関するワークショップ
　市民公募･各施設等の専門職など16名で。
2001年4月　認知症専用単独型通所介護開始
2003年4月　認知症対応型共同生活介護開始
2004年4月　地域食堂開始
2007年2月　グループリビング開始



NPO 法人・わたぼうしの家は、2000 年 6 月に地域づくりを柱に立ち上げ、法人格を取得しました。2000 年 8 月から、認知症高齢者のグループホームを作ることを考えていましたので、そのための建築に関する WS をはじめました。WS 終了後も具体的に市民と構想し、グループホームを開設したのは 2003 年 4 月です。2001 年に認知症対応型通所介護を始めました。これは現在も続いております。2004 年 4 月から毎週月曜日、地域食堂を始めております。釧路市は人口が 18.8 万人で、高齢化率が約 24%です。実際に法人を立ち上げたところは釧路市と同じくらいの高齢化率で、一人暮らし（特に女性）の方が多いです。私達は地域づくりから始めました。私達も介護が必要となった時に、地域に生き続けたいという想いを持っていましたので仕組みづくりをしました。ニーズ調査などいろいろな仕掛けを行いました。少しずつ皆さんが集まってきて下さり、徐々に回数が増え毎月 1 回集まるようになって、ご飯を食べたり、手作業をしたりする中で、2004 年に法人のメンバーが主体になるのではなくみなさんの手助けで地域食堂を作りたいと話しましたところ「月 1 回程度なら出来るんじゃない」ということで 5 班編成で関わっていただきました。地域食堂はどんどん広がりを見せまして、四国や様々な道外の方を含めて見学があり、全国にコミュニティ・レストランが増えていくという火種役になったと思っております。今、10 年前に関わって下さった高齢者の人たちが当たり前ですが年を取り、最高齢 84 歳の人が配膳をし、手伝って下さっています。2007 年 2 月に GL を開設しました。このグループリビングもわたぼうしの家の共に地域に生きるということを具体的にしたものです。

また地域食事会、地域づくりなど地域の人たちと一緒に進めてきました宅老というのは、2000 年に法人を立ち上げた時から、虚弱の方や認知症の方など様々な人たちを送迎し一日

過ごしていただき、介護保険の事業ではありませんが行ってきました。実際には地域食堂をしたことで、地域と共に生きるということが実感できました。このように 2000 年から始まった事業ですが、地域の人達の加齢に伴って出てくる回数が少なくなったり、まだまだ出て来てほしい人が自宅から出てこない、そのことを考え法人として何ができるか模索していました。生活の場所を作った方が良いという話もありまして、JKA の補助金が出るという話を聞きましたので、GL ほがら館を立ち上げようと進めてきました。

釧路市内で今話してきたように、わたぼうしの家でやっているデイサービス、本体の事務局、グループホームさんぽみち、ほがら館の距離は歩くと５～６分、車でも２，３分のところで事業を行っています。

【 運営までの経緯 】

- □ 日本自転車振興会の補助(64,988千円)
- □ 2006年5月　書類受理
- □ 業者入札➔決定
- □ 土地購入
- □ 8月運営委員会
- □ 入居者募集・名称決定・町内会説明等
- □ 2007年1月　建物引き渡し
  講演会(講師：西條節子氏)
  見学会(約150人)
- □ 2月　2名入居

【個室は16畳です】
【共有スペース】
ミニキッチン、トイレ、収納、バルコニー、
照明、緊急コール完備
共有部分：居間、食堂、台所、交流室、浴室、
シャワー室、エレベーター、トイレ、事務室、
駐車場完備

【料　金】
※基本利用料金 ： 100，000円／月
家賃50，000円 水道光熱費20，000円 運営費30，000円
※食事は「ワーカーズよう湖」との契約　朝・夕食35，000円
※預かり金 ： 200万円（退去時は返還いたします。）

NPO法人 わたぼうしの家

【 グループリビングは財団法人JKAの補助によって建てました 】

ほがら館を立ち上げる前に、補助が決まったということで、埼玉にあります国の補助金を貰って GL を始めた小川さんと、次に COCO 湘南の西條さんに来ていただきまして、GL とはどのようなものか、暮らし方はどのようなものか講演していただきました。レジュメの最後のページにあります「これからの老いのかたち～GL で生きる～講演会アンケート」というものがあるのですけれども、１回目のアンケートの時に 150 名ぐらいの方が来ていただいて、アンケートを取りましたら「新しい時代がやってくる感を持ちました」「一人一人の個が尊重されるという事ですね」「前向きな生き方、選びたいとつくづく思いました」ということを書いていただいたものですから、私たちは非常に心強く、すぐ入居する９人が

くる(満室になる)ということで、手応えを少し感じました。ほがら館が出来て、見学会をしまして、150 人ぐらいの方が見学に来たので、さらに手応えを強くしたのですが、開けてみましたらなかなか難しいという。9 人入居できるのですけど、最高 8 人しか入居しかなったという事ですね。

入居者状況

名　前		入居時年齢	入居年月日	退去年月日	退去理由
K･H	女性	84歳	H19/2/15	H21/12/25(86)	認知症･共同生活不可
O･K	女性	74歳	H19/ 2/15		
I･N	女性	79歳	H19/ 3/19	H22/12/ 1(82)	身体機能低下･有料老人ホーム入居
S･S	女性	60歳	H19/ 7/30	H21/ 1/10(62)	他入居者との年齢の差
K･T	男性	91歳	H19/12/ 1		
K･H	女性	81歳	H19/12/ 6		
S･I	女性	83歳	H20/ 2/ 1	H21/ 5/10(84)	夜間が不安･有料老人ホーム入居
T･K	女性	78歳	H20/ 7/29		
H･K	女性	89歳	H21/12/ 1		

課題『入居者が増えない』ことから見えてきたこと

- □「自立と共生」
- □ 高齢者の自立！
- □ 不安が増幅する要因

↓

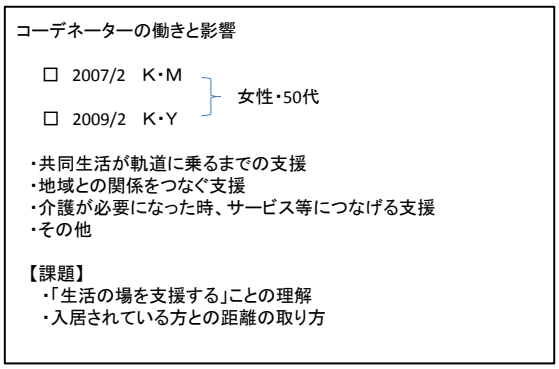
良好な人間関係

- □ 料金設定

入居者の状況ですけれども、退去者が 4 人います。一番多かった時が 8 人ですけれど、今は 5 名です。なかなかそれ以上に入居者が増えないという事で、私達はどうしたらいいか、そしてなぜ入居する人がいないのかと考えております。ある方が「入居する際に面接をする」ということなのですが、私達のところでは入りたいという意思があったら、こちらの選択肢はないなと、入っていただこうと思っております。GL についての意識も持ってきているでしょうし、それからいろんな話し合いはもちろんしますけれども、入りたいという意思のある方には入ってもらうという形です。ほがら館はこのような状況の中におります。実際に私達が課題として感じていることは、入居者が増えないという事は、これは結果なんですね。入居者が増えないという結果を理事会などで検討していく中で、自立と共生という事自体が非常に分かりづらいのではないか。分かりづらいというのは、最初に入ってきた人から「自立するとはこういうことですよ」「ほがら館に夜間、人はいませんよ」など具体的なことを一つ一つ説明しながら話し合いをして、入居して下さいました。ただ大江先生が先程おっしゃいましたように、加齢とともに言わなかった「夜誰もいないのよね」……って最初からいないんですよね。でも言われてしまうと「うーん…いないんです。初めからのお約束です」となる感じで…。高齢者の自立と私達の予想にずれが生じてきているのかなと感じるようになりました。そして自立という時に、なぜ「夜の不安」や「いざという時に」ということを夏目さんとも話していたんですけど、具体的な何かではないんですね。

釧路市は地震が多い所で、震度４～５では驚かないですね。震度４かな、ちょっと大きいかなとなって、鉢を下ろそうと考える程度です。しかし高齢になると、釧路で育って当たり前のように受け入れていた(という表現は変ですけれど)ことも、身体の機能低下など様々なことが起こると、判断力が劣り、逃げていいのかどうか、判断することができなく

なるなどがあります。何人かが足をくじく、椅子から落ちて腰を落とすとか、骨折をしてしまうという事があると、自分には起こっていないけど「何か」起こったらどうしよう、昼間はコーディネーターがいるけど夜は誰もいないからどうしよう、ということがみんなに不安が広がっているんだろうな、と感じます。その時に大丈夫ですよと緊急連絡網を作ったりなど様々な対応はしているのですが、声をかけたらすぐ来てくれる人が欲しいというのが現実なのかなとつくづく感じております。もう一つは良好な関係で、どうしても双方向にならない、一方的になってしまう。初めのうちはそれほど意識していなかったのですけど、だんだん寄り掛かる率が高くなっていくというのがいろんなところで見え隠れしたのです。本当は良好だと感じていた関係が、寄り掛かられると思った人が、どうも変だと思い関係性がぎこちなくなっていったのです。料金設定については、地域性など様々なのですけど、料金設定が最近 5,000 円安くなったんです。釧路市に住んでいる人やご主人の年金で暮らしている人たちは GL のその後の生活が不安なようです。全く払えない金額かと言うわけでもないのですが、全部を使うという感覚がある。逆の言い方をすると、生活にこんなに使ってしまったらば、蓄えが無くいざという時に何もなくなってしまう。200 万円の預り金は部屋を改装したり、汚したりしなければまるまるお返しするのです。何かあった時に 200 万あれば大丈夫だろうと考え設定したのですが、あるけど預けてしまうのは抵抗感を抱く、料金設定を安くすればいいのかというとそうでもないような気がしました。



入居者がコーディネーターになっている GL が多いですけど、ほがら館は日勤のコーディネーターがいます。コーディネーターの働きっていうのが要です。実際には、共同生活が軌道にのる迄の支援や地域との関係をつなぐ支援や、介護が必要になった時にサービスをつないでいく支援などが非常に大事です。寄りかかりが多くなると、コーディネーターの負担が大きくなります。例えば金瀬さんは今日、明日はいないわけで「いないの？」という声があったり、夜間に人がいなくても食事を作る人もいるし、連絡網で連絡をすればいいけれどもなかなかそうはいかない。寄りかかりが多くなればなるほど、要であるコーディネーターとの関係性もちょっとずつギクシャクしていきます。
生活の場で支援することをコーディネーターが何年かかけ、自分のもの(見える形)にしてきているんですけれども、入居者と共有出来ないこともあるのかな、と感じますね。

スライドにはコーディネーターは２人目と書いているのですが、実は３人目です。最初の人は普通の職場と違って、形になるものがなかなか見えなかったため辞めました。今は落ち着いてやって下さっているのですけれども、このように課題は多くあります。先程言った、私達が説明会などで手応えを感じるんですけど、でもなかなか入居には結びつかないのが現状で、今は夜間のことなどを真剣に考えている所です。

「これからの老いのかたち」～グループリビングで生きる～講演会アンケート
参加者合計68名
1. 性　別　①男（6名）②女（30名）　　2. 平均年齢　67. 6歳
3. 今日の講演を聞いてグループリビングについて理解できましたか？
①理解できた（27人）　②だいたい理解できた（8人）　③理解できない

4. 今日の講演会の感想をご記入下さい
○ 入所したいと思っても金銭的に無理。
○ 大変良かったです。色々参考になりありがとうございました。
○ 現代の社会問題であり、今後益々こうした対策が必要になることだと痛感しました。
○ とても感動しました。
○ ビデオも講師のお話も、とても良く分かりやすかったです。自分の生き方の最終ページをしっかり持ちたいと思いました。
○ 新しい時代がやって来るという感を持ちました。一人ひとりの個が尊重されるという事ですね。ビデオの利用者さんの顔が生き生きとしていました。
○ 前向きな生き方、選びたいとつくづく思いました。
○ 高齢者が生きがいをもって暮らしている様子にとても元気をもらいました。色々なネットワークを広げる大切さをあらためて思い知らされました。
○ 私も老後の事を心配しておりましたので参考にさせていただきます。
○ 大変勉強になりました。
○ 全国で最初に立ち上げた先進事例をありがとうございます。税金を社会保障に使って欲しい。
○ 将来の生き方の参考にとてもよいお話でした。
○ 長年住み慣れた土地で一生を過ごすのはとても大切な事なのだと思った。子供の無い私共は、いずれこのような施設でお世話になる事と思うので、これから沢山増えてほしいです。
○ 今の世の中、長生きするのが当たり前、しかし、元気でいるのは大変！だと感じます。沢山の人に助けられる場がなければとは思います。これからこのような“家”が必要とされると思います。

5. ほがら館の見学会を行ないますが見学したいと思いますか？
①ぜひ見学したいと思う（31人）　②全く興味がない

NPO法人わたぼうしの家設立10周年特別事業

NPO法人ウィメンズ・アクション・ネットワーク（WAN）理事長
東京大学大学名誉教授

上野千鶴子講演会

あの、上野千鶴子さんが釧路に来ます。
社会派研究者として高齢者・研究者の立場で講演します。
お友達を誘って参加しませんか？？？
日　時：平成23年7月30日（土）
場　所：釧路市観光国際交流センター 1階

【第1部】午後1時～ 200人規模
対象者：一般市民
「おひとりさまの老後」1部
サブタイトル「高齢者が自立して生きるとは？」

【第2部】午後3時30分～ 200人規模
対象者：介護・福祉・医療の関係者
「おひとりさまの老後」2部
サブタイトル「これからの高齢者を取り巻く社会環境」

入場料は無料です。
整理券をわたぼうしの家各事業所（わたぼうしの家・GHさんぽみち(電話44-1123)・ほがら館）で6月13日から配布します。

NPO 法人わたぼうしの家を立ち上げてから 11 年目になったのですが、地域食堂が読売新聞社賞で 100 万円を頂きました。『おひとりさまの老後』を書いた上野千鶴子さんをお呼びして、ほがら館のための見学と入居される人たちを起こしていこうと講演会を企画しているところです。

３．明日への風　くらし・生きる・生き切る場

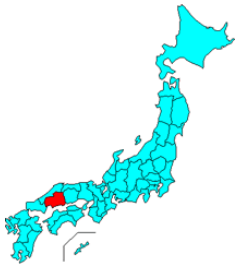
渡邉 壽江 氏

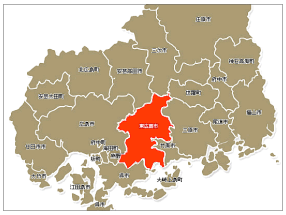
● NPO法人
地域福祉活動支援協会
人間大好き　理事長

社会福祉士・介護支援専門員・児童指導員・児童福祉司・知的障害者福祉司・
精神障害者訪問介護員・認知症高齢者実践者リーダー・准看護師
2005年　介護支援センター・デイサービスセンター・
　　ヘルパーステーションつむぎ開設
2007年　小規模多機能介護施設つむぎ開設
2010年　有料老人ホーム、デイサービスセンター明日への風開設

こんにちは。広島県東広島市から参りました、渡邉と申します。NPO 法人地域福祉活動支援協会人間大好きといいます。

広島県東広島市

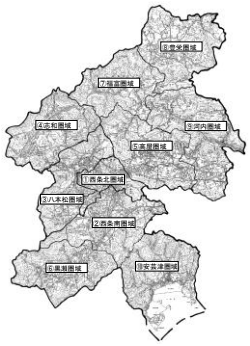




東広島市の日常生活圏域

日常生活圏域

① 西条北圏域	西条町の西条南圏域を除く地区
② 西条南圏域	西条中央、鏡山、御園宇及び向陽地区
③ 八本松圏域	八本松町
④ 志和圏域	志和町
⑤ 高屋圏域	高屋町
⑥ 黒瀬圏域	黒瀬町
⑦ 福富圏域	福富町
⑧ 豊栄圏域	豊栄町
⑨ 河内圏域	河内町
⑩ 安芸津圏域	安芸津町



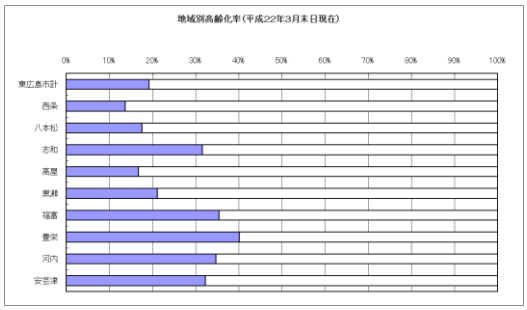
東広島市の人口と高齢化率

○地域別高齢者数（平成22年3月末日現在）

（単位：人）

	人口	65歳以上人口	高齢化率
西条	64,653	8,814	13.63%
八本松	27,134	4,771	17.58%
志和	7,414	2,340	31.56%
高屋	30,543	5,112	16.74%
黒瀬	23,614	4,991	21.14%
福富	2,763	980	35.47%
豊栄	3,994	1,602	40.11%
河内	6,503	2,259	34.74%
安芸津	11,294	3,646	32.28%
東広島市計	177,912	34,515	19.40%

東広島市の人口と高齢化率



私どもの施設は八本松にあるのですが、高齢化率は 17.5%ぐらいです。人口については東広島市は 18 万ほどおられます。八本松町は約 2.7 万人です。

小規模多機能介護施設
泊まれて通える施設　つむぎ

デイサービスセンター　つむぎ

高齢者生き活きグループリビング
「明日への風」

小規模多機能型介護施設は全部木造です。デイサービスセンターも GL も全部木造です。

つむぎの無人野菜市

写真は無人の野菜市をしているところで野菜は、家庭菜園をやっている近所の方達６、７人や GL の利用者が作られたものを販売しています。ジャガイモだったり玉ねぎだったりするのですが、結構一生懸命御利用者が販売努力をされておられ、お寿司を食べに行く費用に充てておられます。

子どもの日まつり

協力：NPO法人　あそび環境Museumアフタフバーバンさん

もちつき大会

これは昨年の５月に、GL と近くの公民館２カ所で開催したのですが、地域の子供たちが柏餅を作ったり、忍者ごっこをしました。

これは餅つき大会で、地域の方々が自由に来て、もち米やら小豆やらいろいろ持ってきて下さっています。「渡邉さん、そろそろ餅つき大会じゃろ？」って杵やら臼やらを用意して下さって「はよせにゃ」と言われてやっております。法人が主催した餅つき大会でありながら、法人はあまり動いていません。

きもだめし大会

250人の参加がありました

世羅西明神太鼓も大迫力♪

無料の学習塾
（毎週2回）

これはきも試し大会で、法人の施設全体行事でやっています。約８年前に始めたのですが、その頃小学生のお子さんの殺人事件がありまして「絶対無理だろ、怖がって逆にできないだろ。」と言われまして。私は余計しないといけない「じゃあやらなくちゃ」と思いまして「子供たちの地域を好きになってもらって、地域に戻りたいとか地域の人間そのものが好きになってもらうためにやろう。」ということで、あえて夜遅い時間に、小さい子は、親子連れでお願いしているのですが、きもだめし大会を続けております。ボランティアさんがお化けになって地域の暗闇のところに隠れております。それをスタンプラリーにして、墓場や神社に設置して、子供たちに地域の思い出・夏の思い出を作ってもらうためにやっております。きゃあ、きゃあと大きな叫び声が響くので近所の派出所にも届けています。

これは GL でやっているのですが、家庭の事情で塾に行けない中学生・高校生の子に広島大学の学生さんがボランティア（交通費やおやつ代は野菜市から２割貰う）で、交代で週に２回勉強を教えます。

学習塾　クリスマス会

県央部の町づくりへ
（福富町、河内町、豊栄町）

真面目な婚活パーティー

これは学習塾の子供たちと先生(広島大学の学生)と紙芝居のボランティアさんと GL のお年寄りのクリスマス会です。お年寄りが非常に喜ばれまして、学生さんたちがピアノやギターを弾いてくれました。これも法人は、料理の材料を買ってお金を出したくらいで、学生さんと子供たちが勝手にやっちゃったクリスマス会です。

これは県中央、東広島市の北部での婚活パーティーなのですが、15 人ずつ男女が集まりまして、５組が成立しました。（参加者、驚嘆の声）お嫁さんが来ないというので、またこの町で今年度障がい者の就労支援事業を開始するので、まちづくりの一環として開催したものです。県央商工会とＮＰＯ法人がコラボしまして「300 人の独身男性がおるけん、なんとかせにゃいけん。少子化以前の問題でしょ」という話になりまして、真面目にやりまし

た。真剣に婚活パーティーに開催に協力しまして、この地域のイタリアンレストランの方も協力して下さいました。なぜか人間大好きがこれに関わっているのが不思議なのですが、楽しいこと、町のためになることなら何でもかまわないとがんばってみようと思います。

社会規範を守れず、
現在生きにくい子どもたちのための
居場所作りのパーティー開催

GL のそばの公民館で非行少年、地域に嫌われている子供たちの居場所づくりのために、勉強を教えてくれている広島大学の学生さんと共にパーティーをしてくれました。今度はそうめん流しをする予定です。その子達に光を当ててあげて、居場所を作ってあげたいなと思ってやっています。

安全野菜作り者の学びと
懇親会

平成23年7月18日(月)開催予定

これも地域の方達が手を貸して下さっております。野菜販売をしていますが、今月野菜作りをしている人たちの学びの会と農薬を使わない野菜のアイスクリーム試食会をします。あらたな野菜の販路や展開を考えていこうとしています。

一応高齢者が主体の事業所なので、高齢者の方達のイベントをご紹介します。先程、障がい者就労支援事業を開始すると言いましたが、GL の横に大きな畑だった空地がありまして、なぜか耕運機を買いました。うちの事業所と別の事業所の職員さんがそこを耕運機で耕してくれまして、野菜がとれて無人市に出すようになりました。GL の利用者がそれでは物足りなくなりまして、もっと働く場所を作ってあげにゃいけんし、北部の空いた農耕地をなんとかしたいという事で、障がい者就労支援の農場が出来たらいいなあと、開始することになりました。GL から障がい者就労支援に半分利用者、半分就業者として働いてもらって給料を出すことのできる人が生まれてほしいと思ってます。

この写真はデイサービスと小規模多機能型居宅介護の写真なのですが、笑顔がとても素敵ですね。うちはレクリエーションや～療法よりも、利用者が生きている人、人間であることを考えにゃいけんと思っております。

年間外出行事

折り鶴奉納

広島ですから原爆に遭われた方もいらっしゃいます。何とかしてその人達に「自分達が生きている何か」を伝えたいと思いまして、折鶴を毎年折って奉納しております。

こちらは小規模多機能型の利用者さんなのですが、何かこうじっと黙ってみておられる方もいらっしゃって、今までにない姿も見られました。これはＧＬでのフラダンス教室で、先生が来られています。職員と利用者と先生と何人かの生徒、近所の方とでフラダンス教室を月２回程度、勝手にやっております。

これはＧＬでの陶芸教室なのですが、実際に陶芸をやられている先生がわざわざろくろを持ってきてくださいます。売り物にはならないのだろうと思いますが、かなりプロフェッショナルな作品を作っております。

これはＧＬのウッドデッキなのですが、日向ぼっこしたり、そうめん流しをしたりしております。無人の野菜市のお金が貯まったらみんなでちょっとお金をたして、おいしいお寿司屋さんに行きます。

Aさん（女性　101歳）の
投げかけてくださったもの

GL のみなさんに最期まで、いていただきたいと私は痛切に思っております。それを考えさせて下さった方のお話をしたいと思います。今年の３月に 101 歳のＡさんが亡くなられたのですが、この方の死を見させていただいて、思ったことです。 GL のみなさんに最期まで、いていただきたいと私は痛切に思っております。それを考えさせて下さった方のお話をしたいと思います。今年の３月に 101 歳のＡさんが亡くなられたのですが、この方の死を見させていただいて、思ったことです。

小規模多機能型居宅介護で過ごされたのですが、亡くなられる数日前に状態が悪く、誤嚥(ごえん)性肺炎で、高い熱を何日も出され、回復してまた熱を出してという繰り返しを段々間隔が短くなりました。最後の前日は大変状態が悪かったのですが、朝回復されました。「腹減ったー」と言われて、朝食を完食されました。その後状態も良いし、息子さんもご家族で来られたのでビデオを撮りましょうということになって、撮影していました。そうしましたら、息が段々荒くなりまして、状態が悪化していきました。酸素（GL にもボンベや SPO2 など医療的器具も置いています。緊急時にも実際役立っております）もお願いしましたが、どんどん悪化しまして、息子さんが「もういいよ」と言われた瞬間に亡くなられました。その時に家族みんなで来られていまして、曾孫さんやお孫さんなど５、６人が来られていて、ビデオにその姿が映っておりました。亡くなられた時に男の子の曾孫さんと女の子の曾孫さんがおりまして、男の子がカーテンを開けて外を見ていました。「男の子は退屈なのかな」と思いました。ご本人が亡くなられる瞬間も子供たちは退屈ですから、部屋の中を走り回って遊んだり、お菓子を食べたりしていました。亡くなられた後、カーテンを開けて窓の外を見た後、男の子がこっちを見ました。「どうしたのかな、もう飽きたのかな」と思ったら、涙を一所懸命に拭っているんです。目の前にひいおばあちゃんが横たわってらっしゃって、女の子も一緒に泣いていました。孫にあたられるお母さんがご遺体の上に伏せて、曾孫さん２人を抱きかかえて「ここにいるみんなおばあちゃんの血が繋がってんよ。おばあちゃんに似てるんよ」って言ったら、女の子が「ひいおばあちゃんに似てるんじゃなくて、お母さんとお父さんに似てるんよ」って亡くなられた直後に言われた時に、私は生ききった姿を曾孫さんに見せられたそのお姿に言葉がなくなってしまいました。小規模多機能は 7.43 ㎡(平米)ですごく狭いのですが、もっともっと広い所でもっともっと生ききって家族や次の世代に子供たちに何かを伝えていって死んでもらいたいと思ったのです。絶対に GL で最期を看取りたいと思いました。

ターミナルケアに求められるもの

1）痛み、苦痛のコントロール
2）不安、恐怖への心の安定
3）最期へ向かって行ききるための前向きな動きへの支援
4）亡くなられた後の医療的ケアとグリーフケアと社会的なプロセス

在宅ホスピスボランティアの養成について

今ターミナルケア、ホスピスに関わることのできるボランティアさんを、育成しようと計画を練っている所です。小規模多機能にはいろんな方がおられますが、最後は幸せに亡くなってもらいたいと思っております。

すべての人は幸せに生きて
幸せに最期を迎える権利があると
信じています。

GL での加齢による状態の変化や夜間のことが議題に出ましたが、うちでは希望者には１人１晩 1,500 円をいただいております。うちは訪問介護事業所もやっておりまして、そこから制度外で職員さんに来てもらって宿直と訪問介護をやってもらっております。自主事業で､頭割りをしたら 1,500 円ぐらいが妥当かなということです｡希望されない方には 1,500 円は貰いませんし、夜は覗きません。夜何回か覗いてもらったり、状態が悪かったり、トイレ解除をしてもらったりしていますが、1,500 円を８人のみなさんにお願いしています。状態が悪化したら、というのはＧＬすべての問題でもあるのですが、状態の悪い方を、良い方が心の支えをして下さっています。悪い方の支え、例えばものを落とされたら拾い「顔色良くないからお医者さんに診てもらったら」と声がかかったり、いろんな形で助け合っていらっしゃるような気がします。それがちゃんと出来ているかは分からないのですが、いろいろ試行錯誤で取り組んでいます。大江委員長がおっしゃった、これから課題として考えていかねばならないと思っております。ありがとうございました。

Ⅴ　ディスカッション

１．問題提起　小規模の暮らしの優位性と問題点

規模の大きい高専賃や有料老人ホームが増加している。そのような中でグループリビングの少数の暮らしは居住者、スタッフ、地域にとって何が優位性で何が問題点なのか。

（グループ D）

GL を立ち上げる時には若く意識も高いのですが、だんだん加齢するにしたがって、GL への意識がトーンダウンしていく問題があると感じました。小規模であるが故に「夜の面倒を見てもらえないから不安、お世話してもらえる大規模の方がいい」という声も出てくるのではないか、という話が出ました。

一方、良い所は昔の長屋生活同様、気心知れた、ご近所付き合い、町内会、町の子供たちを集めて子供を呼べるような場所になれる。街の核になって、まちづくりにも役立つ住宅に発展していくのではないかという意見も出ました。

（グループ G）

自立や共生に対して意識が高い方にとっては、たいへん有意義で優位性のある暮らし方ですが、関係性が密になることで、自分が思った暮らしと違う暮らし方になってしまう方もいるのではないか、その時のサポートはどうするべきかという話も出ました。自立と共生に対する意識がない方、ゆっくり静かに過ごしたい方もいるので、人間関係の部分の共生が大変という意見も出ました。また必要以上に関わらない、自分たちで衝突しながら深めて関係性が良くなることもあるので、これも自立の一つなのかなと思います。今ある家族や制度に必要以上に頼りすぎずに、上手に支援を使うのも居住者にとっての自立につながるという話で終わりました。

（その他のグループ）

・優位性があるのは居住者、スタッフも少人数なのでみんなの顔が見える。
・地域交流によって居住者だけでなく外部の人も交流によって生きがいを感じられるのではないか。
・少人数なので各自のニーズに応えられる。

（夏目幸子氏　コメント）

夏目　幸子 氏
● 全国高齢者生き活きグループリビング支援事業委員
● NPO法人 住まい・まち研究会　理事長

1級建築士・震災建築物応急危険度判定士
日本大学理工学部建築学科卒業
夏目設計事務所主宰
2005年　NPO法人 住まい・まち研究会設立
グループリビングももとせ開設
著書「やっぱりわが家で暮らしたい」（2000 岩波書店）等

夏目でございます。私は、「住まいづくり」という立場からGLという住まい方にずっと以前から関心を持っていたのですが、たまたま(財)JKA（その当時は自転車振興会）の補助金事業としてのスタートした、さわやか福祉財団の「生き活きグループホーム研究事業」（認知症グループホームが制度化される以前）に関わらせていただいたのが、ＧＬに深入りする大きなきっかけです。

現在は、千葉県成田市でNPOを立ち上げて、グループリビングを建設・運営し、私も入居者として暮しております。様々な問題を抱えながら、今日はコメンテーターという役目をいただいていますが、皆さんと一緒に勉強させていただきたいと思います。

さて、ＧＬの話題で必ず出るのが「依存」のこと。「こんなところに暮らしたら良さそう……でも“何か”あったらどうするの？」。何かって、何なの？　何だか分からないけれど、大きな「お化け」に押しつぶされていて、GLの暮らしのプラスの部分が見えてこないのではないかと思います。でも、「予測できないほどの何か、越えられないほどの何か」は起こっていない、というのが現状ではないのでしょうか。私たちのＧＬはとても未熟で、頼りないGLの運営をしていることは自覚していますが、何かが起こったらそれを越えられる力をつけておこう、その時々に実験していこう、考えていこう、……今のところ４年経ちますが、何も起こりません。スタッフもいません。入居者が互いに心配りしながら暮しているのですが、意外と何も起こらないものだな、というのが現在です。しかし、加齢は止まりませんので、これから先々、病気を持った時、何か問題が起こった時には入居者全員、NPOのメンバー、支えてくれる皆さん、共通の問題として解決していこうと思っています。

むしろ、グループＣで出た話題は「GL はやっぱり何だか分からない」というご意見で、これからGLを作ろうと思っているけど、よく分からないというお話があって、やはり介護付きの施設の方がいいのかな、と思ってしまわぬように支援事業は進んでいかねばならないと思います。「GL は失敗するよ、上手くいかないよ」って言われることもあります。そうではなくて「意外とうまくいくよ」という意見もたくさん出てくるようなGLの運営があ

ちこちにできたらいいなと思います。「小規模だからダメ」ではなく「小規模だから良かった」とか、支える人がいないからお互いを支えて合っていこうという意識が、入居時はなくても、徐々に意識が高まるような GL が出来ていたらいいなと思っているのですが、夢でしょうか。

（大江委員長　コメント）

いつも学生には「問うことなしに答え無し」と教えています。問うことは答えに近づけば近づくほど、核心的な問いになります。問い続けないと答えに近づかないので、問い続けることが一番大事だと思います。ぜひ夏目さんも問い続けていただきたいと思います。

私の母は昨年 94 歳で他界したのですが、88 歳の時に独り暮らしは限界だということでどうするかとなりました。そして母と川崎にある COCO 宮内に行きました。それがきっかけで現在 COCO 宮内の理事もさせていただいています。母親は行ってみて「私はここは無理」ということでした。それは誰かに世話をされたい、それがないと不安だという気持ちだったのだと思います。結局ベネッセの有料老人ホームに入ったのですが、ベネッセに引っ越して私が最初に訪ねた時の第一声が「することがないのよ」でした。これに尽きるのですね。三食出るし、服薬管理もしっかりしていて安心なんです。でも母はもう少し自分のことを自分でしたかったのでしょう。全体に会話もないし、当然ですがスタッフ依存型なんですね。もう少し様々な選択肢があって良いわけです。そういう選択肢があまりにも少なかった中で、GL という暮らし方、10 人集まった 1 人暮らしと私は考えているのですが、そういう暮らし方は自宅にいるのと同じなんです。 1 人はもうダメだと思ったら、子のお世話になるなり、有料老人ホームに入るなり選択肢はあります。ですが GL はそういう所に行くまでの時間が長く取れるメリットがあると思っています。制度サービスが提供する明確なスペックがあった安心感を取るのか、別のものを模索するか、その時に選択肢に入るものなのではないかなと思います。

２．問題提起　「自立と共生」の理念と暮らし

自立の定義は「自分の残存能力を発揮させるために必要な支援を調達する」である。この言葉は「自立するには共生が必要」であることにもなる。これまでの一方的な支援ではない関係を運営者、スタッフ、居住者においてどのように実現しているか、また実現させればいいか。

（グループ B）

「自立と共生は何か」ですが最後は自分が住みたい GL の理想と出ました。また入居者がコーディネーターに依存するきらいがあることですが、暮らし・運営の主体は入居者、出来ることはやっていただく、出来ないことは周りで助けるという話になりました。高齢者の自立と私達の自立の違いについては、同じではないかという話が出ました。

（グループ E）

入居しない理由ですが、１つはゆっくり静かに暮らしたい方には「高齢者の自立と共生」のハードルが高すぎることがあります。実際にマイペースな方は入居が向いているという意見が出ました。日常のことを細かく詮索しすぎると二の足を踏んでしまうのではないかという話が出ました。また自宅を処分して入る方がいますが、それは想像以上に大変なことで、実際はそのままにして入居される方もいらっしゃるようです。GL を新築して新しいものを立てるだけではなく、既存の住宅を使ってもう少し小規模な、３～４人で若い人も交えて暮らすという生き方も考えられるのではないか、という意見も出ました。

（グループ H）

自立が難しいという話が出されましたが、自立をすることは今をどう生きるか考えることなのではないかということで、グループの方のご家族のお話を出されました。自分で一生懸命出来ることをしており、少しの助けで生きがいに通じて、自立が出来るというお話でした。そして遺言を書くことが、今をどう生きるかを考える機会になるという意見が出されました。また依存することは不安で安心をしたいという表現の現れだという話が出ました。加齢すると、今までできたことが出来なくて、先の見通しが見えないという事で不安が募ります。その不安をどう支えていったらいいのかという話がされました。すると今回の震災の避難所の例が出されまして、避難所の不安を解消しようと思って声掛けをたくさんすればするほど、不安が増長している傾向が判明しました。この不安を解消するポイントは２つあって、１つはしっかりと話を聞いて共感すること、もう１つは質問をしないことです。これからの人生の不安も含めて、不安を解消するにはこのことがポイントになると判明しました。今までの福祉は「してあげること」が福祉の流れでしたが、今は「高齢者の力を奪わないこと」が福祉の流れだと考えています。

（大江委員長　コメント）

佐々木さんのところのコーディネーターは、スタッフを置いています。コーディネーターとは何かというのは、GL 成立時よりいろいろな考え方があると思います。CCOO 湘南の名誉理事長・西條節子さんの著書では「GL は十人十種のものを作りたいということを説明したら、当時の制度の下では 10 人だと有料老人ホーム、施設になってしまう。そこで、その場で“９人が住んで１人がコーディネーターだ”と説明した。そこからコーディネーターが誕生した」という事が書いてあったと思います。

COCO 湘南台のモデルは、最初に作りたい家を構想し、任意の集まりから始まって NPO を取得したのですが、NPO が地主さんに建てて貰った住宅を一括借り上げしています。これはファミレスをつくるときの事業方式と似ている所がありまして、地主にこういう事がやりたい、こういう条件で借りますという事で一括借り上げをします。そこに NPO の正会員である仲間が住むという所からスタートしています。ということは、NPO は居住者の意思を受けて、地主・家主に契約し、生活支援サービスの主体（ワーカーズ・コープおりーぶ）と契約するという契約主体になっていて、その中に居住者が包み込まれているスタイルというのが COCO 湘南台のモデルなんですね。

ところが、(財)JKA が建物や備品に対して補助をすることになり、平均 6,000～8,000 万の補助金を出しました。その補助金を受ける主体が建物を建てるということで家主になったわけです。つまり運営主体の NPO が居住者を包み込んで、居住者の意見を調整して外と契約するのではなく、居住者と契約するという主体になった。(財)JKA の補助によって GL が普及したと同時に、普及する過程で GL が当初の COCO 湘南台モデルと違うものになったところにコーディネーター問題の１つの困難さがあると思います。つまり、NPO が居住者を包み込んでいろんなことを交渉する、契約することであれば、コーディネーターは居住者の間の意見を調整する役割に過ぎないんです。ところが、家主である NPO なり社会福祉法人なりが入居者と契約するとなると、住民側をまとめる役割にならざるを得ない部分があって、CCOO 湘南台モデルのコーディネーターと違う性格を持ってしまいます。

(財)JKA が３年目にグリーンの表紙のマニュアルを作成し、いぶりたすけ愛の星川さんも私も参加しました。そのマニュアルには「コーディネーターが契約主体になる」と書いてあるんです。コーディネーター名で生活支援サービスと契約をしなさいと書いてある。それはある種の一貫性があるんですね。家主との間に交わす居住空間提供サービスと生活支援サービスとを別にしなければいけないということで、生活支援サービスの方はまとまって誰かが代表者となって契約する。居住空間の提供サービスに関しては、個別に借地借家法の下で契約するという形にするのが一番現在の法制度の下では分かりやすいんです。そうでないと施設的なものになってしまう。居住空間提供と生活サービス提供を一緒に同じ主体がやるのは、モデルとしては施設なんですね。高齢者住宅に関して、高専賃登録するか、有料老人ホーム登録するかのどちらにしろと、国交省・厚労省の合意の下で数年前に行われました。今また高齢者居住安定法の改正でよく分からなくなっていますが……。そ

ういうことがあったりして、大きな制度の中ではGLも何かしら位置を定めなければいけないので、住宅であることを主張するとすれば、賃貸契約と生活支援サービスを分けなければいけない。そこにコーディネーターの役割が(財)JKAの考え方だと少し重いものとして降ってきてしまうということもあります。佐々木さんのところのスタッフとしてコーディネーターを置くということと若干違う部分もありますけれども、コーディネーターの位置づけ・役割がいろんな意味合いを持っているんです。誰にどういうことを頼めばいいか、分かりにくいという状況になっているかと思います。これは私はNPOの中に居住者の意思をまとめていく担当理事を置くなり、運営側が居住者と同じ位置に立つという部分を残しておかないと、COCO湘南台モデルでもともと出来上がったGLの意思や趣旨を受け継げないと思うんです。そこらへんがコーディネーターを巡る１つの問題だと思います。

もう少し背景までいくと、共同性を持ちたいというのがGLの根底にあるわけで、共同性を持つことは煩わしい部分があるし、無ければ孤独や寂しさがくるわけです。GLは一番基本である「食」を共同性の中心におこうという形にし、あとは比較的自由にやろうということで、この共同性のジレンマを回避しようとしているのだと思います。今佐々木さんのところに２ヶ月間、避暑で行かれた高坂さんなのですが、COCO湘南台10周年の時に居住者にインタビューをして、ビデオにまとめたときに、お話をうかがっています。その時高坂さんは「ある意味ここでの生活は“冷たい”と言っても良いようなものです」という発言をされています。それはお互いに食事の時間以外はそんなに関わらない。それで自分の生活を楽しんでいる。でも出かけたり、帰ってきたりという気配を感じたり、何をやったかということが食事の話題になることはあるけれども、そんなにベタベタ付き合わない所だなという事をお話になっていたのを記憶しています。そういうスタイルであることが暮らし方の１つのパターンとしてある。でもそれはみんなが出来るわけではない、という所で非常に依存的な入居者がいたりするときなど、実際にどういう風に運営していくかという所で、悩みを抱えたりしたのかなと思います。その答えはどこにあるかは分かりませんが、考えていくべき重要なポイントの１つだと思っております。

３．問題提起　「自立と共生」の理念と地域との関わり

（財）JKA がグループリビングに補助したのはグループリビングが住まいの中の活動に留まらず「自立と共生」を地域に発信していく役割を期待したからである。グループリビングが居住者のみならず地域のために「自立と共生」を普及させることをどのように実現しているか、または実現すればいいのか。

（グループ C）

GL が地域づくりの核になればいいのではというまとめになりました。核になるといっても、しっかりしすぎず、周りが手を貸してくれるような場であればいいなという話がありました。先程渡邉さんの発表で、子供たちを育てる活動や大学生が学習指導をしている姿があり感銘を受けました。子供たちを育てることはお母さん育てにもなるので、将来担っていく子供たちを大事にしていきたいという話が出ました。

（グループ F）

コーディネーターをスタッフがやるのか、入居者がやるのかという話で、入居者が高齢化していくとスタッフへの寄りかかりが強くなるという事でした。入居者の性格面、究極的には一人一人の入居者の性格にもよると思いますが、人間関係は都市部と地方とでかなり違うのではないかという話も出ていました。ただ最終的には入ってきた人の人柄にもよりますけど、どちらかというと都市部はあっさりした人間関係が結べると思います。高齢化した場合、自立から依存に向かいがちだという話の中で、渡邉さんのお話の中では「GL もターミナルまでやれたらいいね」という願望についてお話になったと思うのですけど、訪看をお送りしても費用的には大変なことで、実現可能性としてはかなり難しいのではないかなという意見が出ました。GL とターミナルについてはこれから話し合っていかねばならないのですが、時間になってしまいました。大変難しい問題で GL だけでなく高齢者のどのような住まいでも起こる問題になっていくことだと思い、大変重い問題を投げかけられたなという風に感じております。

（グループ H）

つむぎさんがやっていらっしゃる色々な事業、デイサービスにしても、GL にしても、小規模多機能にしても、いろんな活動をされている中で GL の様子そのものがちょっと具体的に分からないというか、姿が見えにくかったという話が最初は出ました。GL そのものだけでなく、小規模多機能の方やデイサービスの方など、全部を含めて地域との共生をしている姿が見られているという風に感じました。地域の中で垣根のない暮らしを、枠の無い暮らしを子供たちや若者や高齢者を巻き込んで発信しているというか、全体がオープンスペースのようになっていて GL そのものの居住にしている所が GL ではなくて、地域そのもの

をGLのような暮らしに向かっているのがすごいなという話になっていきました。

（その他のグループ）

・地域のために「自立と共生」を普及させるためには民生委員など地域資源との関わり合いを持つことが必要なのではないか。

・地域の人に高齢者や認知症についての理解が乏しい。また施設やGLの活動現状を知らない人が多いので、もっと知ってもらうことが必要。そうすればGLの活動が地域のニーズに応えている活動であることがわかるのではないか。

（大江委員長　コメント）

ターミナルケアの話は西條先生の本がありまして、帯に私も推薦を書いているのですが、中身は赤裸々な話が多く、ここまで西條先生はお書きになるのだとビックリしましたが、なかなか興味深いですので是非お読みください。ターミナルケアに関しては西條先生にお話しいただきたいと思います。

私が感じたのは２つありまして、１つは「自立と共生」の共生の部分は居住者間のみならず、地域の様々な人や資源との関係もある。むしろ後者が重要というご指摘がありまして、まさに渡邉さんが目指していらっしゃるからなのだと感じました。今、COCO 湘南の理事長の最上真理子さんを中心に次世代の GL はどうあるべきかという研究会を開いていますが「コミュニティ・リビング研究会」と名付けています。これは建物一つの中で共同生活をすることを越えて、地域との共生を意識した研究会になっており、COCO 湘南でも意識しております。

もう１つはアトリエの使い方なのですが、アトリエとはCOCO湘南台にあったところから(財)JKAの補助要綱に盛り込まれ、各GLにつくられています。どう作るかどう使うかに関しては各GLではお悩みの点の一つだと思います。それはまさに地域と共生する時の接点になる、媒介になる空間だと思います。それを渡邉さんのところは子供たちに広島大学の学生が教える場という風に使われていて、上手く地域と繋がっています。地域はごく近隣という意味もありますが、少し距離的に離れていても、広島大学の学生のように選択的な関係性も含めて、地域と捉えていいと思います。そういうところをアトリエと結び付けて参加していらっしゃるのは他のGLでも参考になるものではないかと感じました。

（西條節子氏　ターミナルケアについてのコメント）

私はグループリビングに暮らして 12 年目になりますが、私達は我が家で生活を送っています。つまり皆さんの希望は病院という名のキレイなお布団やベッドで死ぬよりも、我が家で自分の日常の家具などに囲まれたところで終わりたい。けれども、一生は一回で終わります。私たちの暮らしは地域とのケアセンターや訪問看護ステーション、ワーカーズ・コープおりーぶなどご協力をいただきながら進めております。

私は今、本当のターミナルケアをやっている病院は日野原先生のピースハウスぐらいだと思っております。各地に緩和ケア病棟がたくさん出来ていますが、ほとんど一般病院と変わらない。何にもしないで、ただボランティアの人が優しくするだけで、本当のターミナルはしてないって感じています。私達はやはり住んでいる家で、みんなで送るのが一番素晴らしいと自負しています。本人の生き方・死に方に寄り添っていけばいいわけで、あまり意気込まず、素晴らしいことをしようと思わないでいけばいいんです。

例えば 24 時間顔を見ていればいいかというとそうではなくて、本人に聞きますとやっぱり「一人で静かにいたい時もある」。ところが、一般的な外側の人たちは「死ぬ間際に、一人にしちゃっては？」というわけです。死ぬ側からすると静かにしたい時もあります。不思議だなと思うのは、日本人の自立性ですが、普段つきあいのない友達が危なくなると義理のように訪ねて来られます。これは日本人の自立性の無さで、本人はくたびれ果ててしまいます。だからと言って、入口に何か書くわけにはいかないし、来てほしい人もいる。難しいといえば難しいけど、普段と同じようにやっていればいい。本人の希望をよく聞いて、寄り添ってあげればいい。97 歳の方は 42 日間でしたけど、ワーカーズの方に食事を特別食にしていただいてずいぶんよく召し上がっていました。３日前には召し上がらなくなりまして、私達は「どうして食べないのか」と聞いたら「もういい」って言うんです。「じゃあそろそろ、お線香立てちゃうからね」とお互いニヤリとしつつ冗談を言いながら、両方とも軽い気持ちで送る・送られることは、入居者にとっても見て安心していきます。そこで初めて「私はこう終わりたい、遺言書を書きたい、こういう風にしたい」というのが普段の生活で出てくる。普通は死の話をすると縁起が悪いと言われますが、「どういう風に

してほしいか」などいつも食事の時に話しています。91 歳で亡くなった方もいらして、希望があれば、何日間かこちらで安置し、埋葬するということもあります。そういう場合は前日にグループリビングの食堂に行って、送別会をやります。楽しいってことはないけど、悲しいってことも無くて、自分もそういう風にできるという安心感がすごく皆さんの中にあっていいんじゃないかなって。COCO 湘南の常務理事をやっていた方は、ターミナルで病院に入られました。その時に訪問して「何だ、これが病院のターミナルなのかな？」という感じでした。家へ帰ってほったらかされて時々声をかけられて友達がしょっちゅう来て、の方がいいしヘルパーさんが来て時々泊まってくれればうちの人も楽だし。本人もそう思っているようでしたが、その方はご家族も病身で家に帰れませんでした。

今一番いいと思う場所は先述のピースハウスです。ただ遠くて、なかなか訪問が出来ない。でも家族は泊まれるし、何でもできます。なぜそんなに違うのかというと、聖路加がやっていまして、患者さんが 22 人いるところを看護師さんが 26 人ぐらいいます。聖路加の看護の学生が実習で入っていらっしゃるという事もあり、キリスト教的な癒しもあります。私の甥 53 歳の場合、月 100 万円と聞いてビックリしましたが、それでも今考えてみると随分安いと思います。あれだけやってもらえるのだから。本人の最後の希望を先生が聞いて、本人がお風呂に入りたかったからいつもお風呂に入れるんです。だから息を引き取った後、夜中に先生が「大好きだったお風呂に入れてあげましょう」と言って夜中 1 時にお風呂に入っていました。ピースハウスは次元が違いますけど、他のところは金の座布団よりも家庭の座布団の方がいいと思います。ターミナルケアはそんなに大変なことではないし、意気込まなくてもいいと思っております。

先程自立と依存の話が出ましたが、私の考えでは、自立って日本人は小さい時から自分の意見を言えなくなって育っていますから、自立は難しいです。依存して何でも任せるのではなくて、やっぱり聴いてあげようとすれば言いたいことはいっぱいあるんですね。高齢者はおとなしい方がいいと、高齢者の自立の芽を取ってしまうことがありはしないかなという感じが最近します。体力が落ちるのは当たり前で、これを依存というのはおかしいわけで、心がいつまでも安定し、必要な手助けを頼むのは依存ではないと思います。体力を任せるのは依頼心の依存ではなくて自然の姿です。

（夏目幸子氏　コメント）

今日はコメンテーターという立場ではなく、１人の参加者としてたくさんのことを勉強させていただきました。今日発表なさった３人の話を伺うとだんだん落ち込んできてしまいました。何年にもわたって地域密着活動をしっかりした方が GL を立ち上げて、その中でも様々な問題を抱えているという事で、どうしようと思っていました。でも最後に西條先生が「そんなに固く考えなくていいよ、起こった問題をその時々に……」という発言をして下さって気持ちが緩みました。地域活動をしっかりしていた所が GL をやるということは、渡邉さんのお話のように小規模多機能のこと、訪問介護のことなど、様々なことと繋がって GL がどんな風になればいいかということが見えると思います。地域の中にいろんな住まい方があって、どれが良いという事ではなくて、GL があってグループホームがあって、様々な形態の個人の住宅があって、私はどんなところでどんな風に暮らしたいかという選択肢があるといいなと思って GL を考えてきましたし、大事なことだと思います。

「自立と共生」という GL の大きなテーマも現実には難しいですね。釧路の佐々木さん発言の「GL を立ち上げた時には入居者はどう選定したらいいんでしょう」という問題も、どこの地域でもそうだと思いますが、ここで暮らそうと決断できる自立した高齢者がまだ少ないと思うんです。暮してみると意外と大丈夫だよね、というのが私達の GL の状況です。何か起こったら、何かあったらどうするの、家族はどう思うのといつもみんなの不安でもあるのですが、暮らしながら解決していこうという意識が高まっているというのが今の状況です。これから加齢によってだんだん自信を失った時にどんな問題が出てきてどのように乗り越えていくかが今後の大きな課題です。今日参加させていただいて、いろんな GL のいろんな形態をお互いに学びあって情報交換をして、より良い方向に進んで行けたらいいなと思います。GL 内だけでなく、地域とどのように関わっていったらよいか、助けていただくだけではなく、地域を育てる力を持っているよねという GL の意識が地域を変えるのではないかと思っております。

私どもの「ももとせ」は、本日お話し下さった 3 例のＧＬと違って、何も地域活動の実績のない地に立ち上げ、未だ迷走飛行しているという状態ですが、機会がありましたらおいでいただいて、学び合う機会をつくりたいと思います。

それからこれは報告ですが、「地域との共生」という事を大切に活動している私たちのＮＰＯでは、今回の震災を体験した後で、地域の支え合い活動を広域支援ネットワークづくりに広げたいと行動を起こしました。今回は夏休みに福島県から那須町に避難している小中学生とその家族二十数人を成田に迎えて、GL を核にして地域のみんなで支援をするプログラムを立ち上げたところです。うまくいくかどうかはわからないのですが、そういったことを含めてお互いを応援したりして頂いたりしながら、こんな GL もあるよ、こんな所はこんなことをやっているよと情報交換しながら互いに育ち合って、地域づくりの力になる GL になれればと思います。コメントにもなりませんが、これからもよろしくお願いします。

Ⅵ　全国高齢者生き活きグループリビング支援事業

１　「高齢者グループリビング普及に向けての登別宣言」について

「高齢者グループリビング普及に向けての登別宣言」（次頁）をグループリビング開発の先駆者である西條節子氏が書いて下さいました。グループリビングを地域の拠点として位置づけ、地方公共団体と協働していくことが地域の質を向上させていくことの１つだと考えます。

登別ワークショップではこの宣言を会場全員でご賛同していただきました。

年　　月　　日

㊟

様

高齢者グループリビング普及に向けての登別宣言

要　望　書

特定非営利活動法人　ＣＯＣＯ湘南
名誉理事長　　西條　節子
理事長　　最上眞理子
慶應義塾大学総合政策学部教授
全国高齢者生き活きグループリビング支援事業
委員長　　大江　守之

第３回全国高齢者活き活きグループリビング支援事業のワークショップ登別集会に当たり、ＪＫＡ支援のグループリビングを中心として、全国より北海道登別市に参集いたしました。これからの高齢者の「自立と共生」の理念を実現し、高齢者の介護予防生活を通して自己実現をはかるため実践と、その方法などを討論し、更にこの実践生活を広げ、高めるために、地域力と行政とのパートナーシップを求めて参りたいと思います。

わが国の高齢者・在住外国籍市民も含めて約１７００余りの自治体において、中学校単位として、このグループリビング生活が築かれることを望むものです。この地域力を支援する条件の整備を強く要望いたします。それは各地域力、市民力を高め高齢者の介護予防生活を広げ又第三の人生の輝く自己実現と、介護医療に対し自治体財政を約２０％近く軽減することが出来ると推計されます。

私たちは、すでに１１年前より実践し、実践を積み上げて参りましたことをご報告するとともに、第３回の研究の討論の中で、これからの政策として政府並びに自治体が地域市民力と共同することが、重要な鍵となります。

ここに私達は１０年以上の実践をふまえて、改めて、グループリビングを作る条件整備を地域に生きる市民として、緊急課題として、取り上げ進められることを強く願うものです。

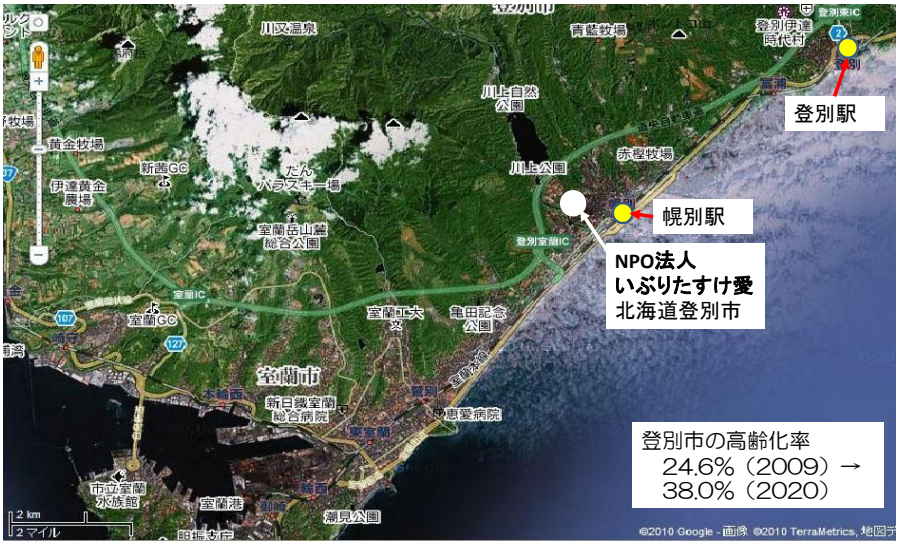
ここに全国高齢者生き活きグループリビングでワークショップに集う全国市民の名において要望いたします。

Ⅶ　見学会報告

1　見学地 NPO 法人「いぶりたすけ愛」の概要（別途調査）

1．立地

北海道の南東、胆振地区に位置する。国道沿いに面した住宅地。グループリビングの向かいには中規模スーパー（COOP さっぽろ）とドラッグストア、グループリビング側の道沿いには郵便局やコンビニがある。いずれも 200M 内にある。今年病院が隣地に出来、さらに便利になった。近接している胆振幌別川は冬は白鳥が訪れる自然豊かな場所、沿岸は遊歩道になっており、居住者の散歩コースになっている。



２．法人の成り立ちと活動内容

平成7年
「登別ライフケアを考える会」設立
（在宅介護）
平成11年
NPO法人「いぶりたすけ愛」設立
平成12年
介護保険事業「優サービス」開始
平成18年
グループリビング「たすけ愛の家」開設
平成23年
「ともかな」開設

法人の活動内容

優サービス
- 指定居宅訪問介護事業
- 指定居宅支援事業
- 福祉有償運送

たすけあい事業
- 在宅サービス
- サロン（地域交流）
- 配食
- グループリビング
- ともかな

３．たすけあい事業について

たすけあい活動

- 入会し正会員、または運営会員になるとサービスを受けることも提供することもできる。
- 入会金　正会員　１万円
　　運営会員1.5万円

- サービスはチケット制
- サービスを提供した人は受け取ったサービス券を現金に清算できる。
- 1時間 6点（1点100円）

福祉サービスの活動というと、提供者とその利用者に分かれがちですが、うちの団体は相方向性の会員です。
会員それぞれが、自分たちにできることでお互いに助け合うという会です。

あらかじめチケットを買うシステムなのでお金が廻るのがいいところなんです。

＊正会員・運営会員はどちらも双方向性の会員だが運営会員は運営に関わり総会に参加できる。

４．活動実績

活動実績（2010年度）
総事業費（経常収益合計）9,761万円
正会員768名　運営会員49人
＊総事業費のうち3,000万円はともかなの建設補助

たすけあい活動

- 在宅サービス　2,402時間／年
- サロン　1,781人／年
- 配食　13,045食／年
- 送迎　3,007人／年
- GL　107名／年
- ゲストルーム　43名／年

優サービス

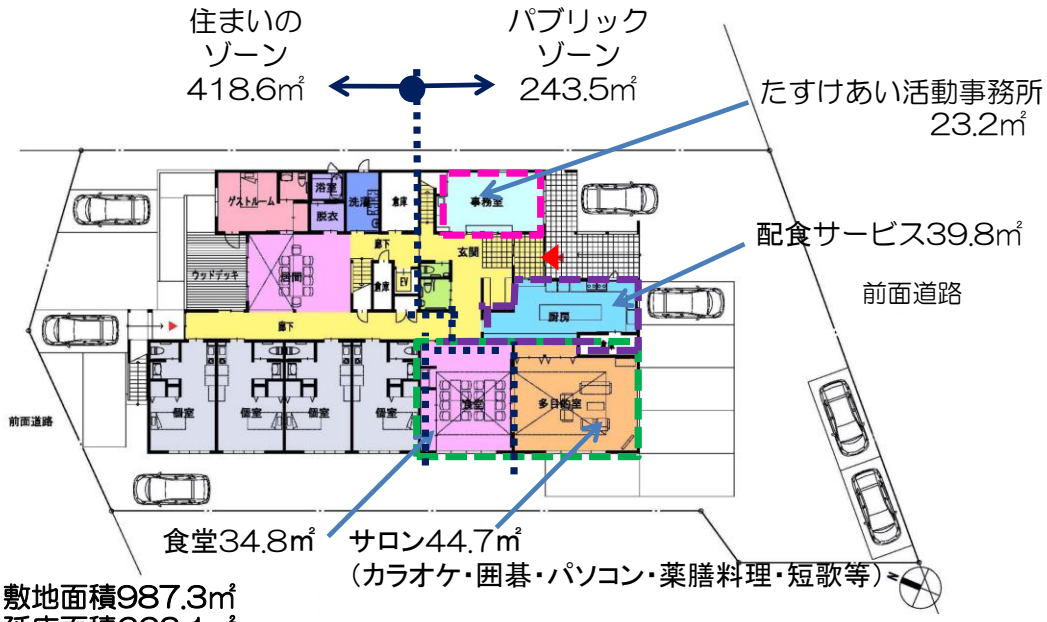
- 訪問介護　890件／年（8,474時間）
- 自立支援　96件／年（1,185時間）
- ケアプラン　398 人／年
- 福祉有償運送　7,306回／年

５．グループリビング概要

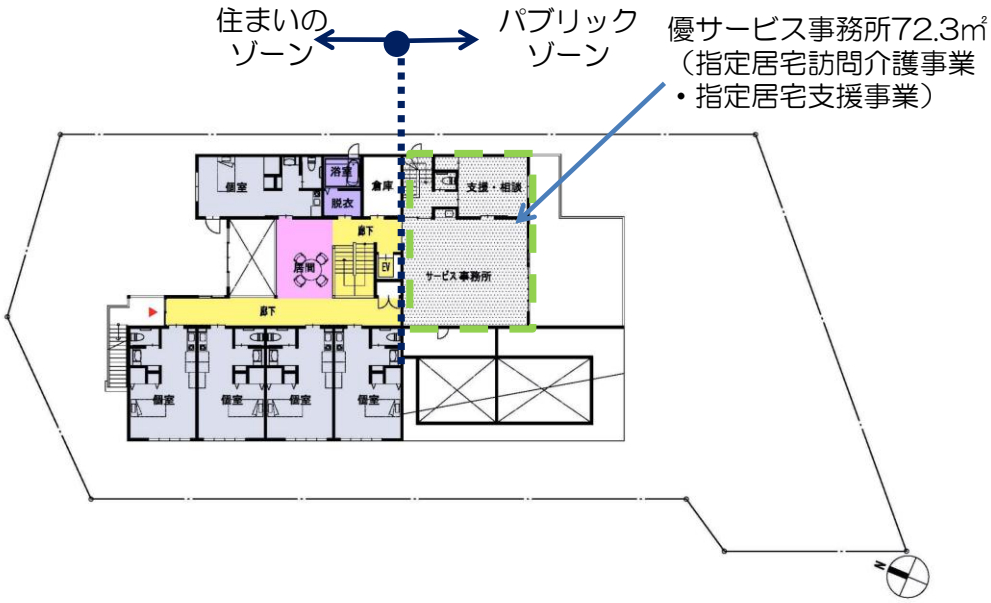
グループリビング

１．入居金０
　月払い費用　11.2万円
　　家賃　5.0万円
　内訳
　　共益費　1.2万円
　　掃除　1.5万円
　　食費　3.5万円
２．入居契約書
　（20年・更新10年）
３．入居者は正会員か運営会員
４．生活支援
　GLの昼、夜の食事、掃除、相談、緊急時の対応
　　（たすけあい事業）
４．土地・建物は法人所有
　NPOの事業はGLの建物が拠点

６．たすけ愛の家　平面図



配置図・１階平面図



２階平面図

７．生活支援

・グループリビングの担当は理事長とスタッフ１名。基本的には自立性を促進するために居住者の生活相談や緊急時の病気の対応や付き添いなどは理事長やスタッフが行うが、それ以外の支援はヘルパーや家族が支援を行う。

・月曜日から土曜日の日中（9:00～18:30）は事務所にスタッフがいる。また日曜日の日中（9:00～18:00）は掃除や食事づくりの人が住まいの中にいる。基本的に夜間の常駐はない。日曜日や夜間の緊急時は理事長に連絡すれば、すぐに駆けつける体制をとっている。

・グループリビングの昼夜の食事と共用部分の掃除は「たすけあい事業」で行う。支援者は「たすけあい事業」の会員。食事づくり、掃除は毎日入る。食事は居住者だけではなく地域への配食やサロンに来る人の食事作りも行っている。平日の食事の献立はグループリビングのスタッフが作るが土日の献立は「たすけあい事業」の食事作りの人が自分の作りたいものや居住者に食べたいものを聞いてそれに応える。朝食の用意は基本的にしないが食事が作れない人などには前日におにぎり等を用意することもある。食材は向いの COOP さっぽろで購入。

・理事長は昼食を居住者と一緒に食べ居住者の様子や体調等を把握する。居住者間の見守りがよく出来ており変化に気づいた場合は居住者から連絡がある。

・介護は在宅にいるのと同じ形態。同法人の「優サービス」（介護保険事業）を利用している人が多いが基本的にはどこの介護事業所に頼んでもよいことになっている。昔在宅で利用していた他の事業所のヘルパーに頼んでいる人もいる。

・介護が必要になった場合、地域包括のケアマネと家族、本人が必要な介護サービスを決める。

・夜間介護の必要な重病の介護者がいたとき「優サービス」（介護事業）と「たすけあい事業」の連携ができスムーズだった。掃除だけだと他のヘルパーでも問題ないが重病時は「たすけあい事業」と「優サービス」が同じ建物内にあるため迅速な対応ができる。

８．合意形成

・居住者は１週間に１回 30 分のミーティングを行う。
・開設した当初はグループリビングの暮らしとはどういうものか、を理事長と居住者全員が一緒に考えた。その結果、スタッフ、居住者がお互いに助けあいながら生活していくことが基盤となった。居住者は見学者が来た時には快く部屋に案内し暮らしの説明をするなど法人に協力的。また住まいのなかでそれぞれの役割を果たしている。
・ミーティングは居住者の楽しみになっている。ミーティングのまとめ役は星川理事長とスタッフの川島さん。暮らしのなかでの問題や誕生日の企画などについて話し合う。誕生日はお祝いに居住者の「夢をかなえる」ことになってる。「亡くなった夫との思い出の湖を見に行きたい。」という希望をかなえたこともある。

ミーティングの様子

９．サロンの活動

・サロンはそれぞれの教室が自主的に運営している。基本的に「たすけあい事業」は場所の提供と昼食、車の手配のみ。法人は特に部屋の使用料はとっていない。
・サロンは月曜から金曜日まで、俳句、短歌、歌声喫茶、カラオケ、絵手紙、体操、薬膳料理、パソコンなどで内容は会員の「やりたいこと」「教えたいこと」で次々と増えてきている。
・参加者は「いぶりたすけ愛」の会員。居住者は興味のある教室を自分で選び参加している。人気があるのは俳句とカラオケ。
・地域の中に 800 人近くの会員がいる。「たすけあい活動」の会員になり入会金 1 万円を払えば、どれに参加してもいい。
・参加費をとるところ、とらない教室がある。参加費は主に先生への謝礼や材料費。パソコンは月 500 円。カラオケは操作している方が最初はボランティアでいいからということやっていたが周りの人が気にして参加者が 300 円ずつ払っている日もある。薬膳料理は先生に来てもらっているので有料。俳句の先生はボランティア。参加者は地域の俳句会に登録しその年会費を払っている。俳句会に入るか入らないかは自由。
・95 歳の先生が体操を教えている。
・俳句の教室で応募した「おーいお茶」の俳句募集で居住者 94 歳が入選し、ボトルに俳句を掲載される。本人だけでなく参加者の良い刺激になっている。

俳句

体操

体操の後のお茶の時間

絵手紙

１０．「ともかな」の活動

・グループリビングの隣地に「ともかな」が 2011 年 4 月にオープン。
・建物はコミュニティカフェ＆レストラン、駄菓子屋、地域の人のものづくりの作品や手作り菓子などの売り場、子育て広場のほか、一人親家庭の住いが併設。
・「ともかな」は、社会貢献したいと考える高齢者や障害者が「ともに夢をかなえる」ために自分の知識や特技を生かし、事業や活動を展開する社会起業家集団。
・共生型基盤整備事業から建設補助。
・「ともかな」では、＜であい・ふれあい・たすけあい＞を大切にし、高齢者から、子ども、赤ちゃん、障害のある人など、誰でもやってきてくつろげる『地域の居場所』づくりを目指している。
・地元の専門学校生と一緒に建物を計画。
・グループリビング居住者は日頃から子供たちのために何かしたいと考えていた。居住者がオーナーとなり「ともかな」に駄菓子屋の事業を立ち上げた。
・現在居住者は駄菓子を入れる袋づくりや店番などを通して運営に関与。
・居住者には月末のミーティングで駄菓子屋の売り上げを発表。

ともかな

社会貢献したいと考える高齢者や障がいを持った人たちが、ともに夢をかなえるために、自分の知識や特技を活かして、事業や活動を展開する社会的起業家集団

食べる・飲む・憩う
コミュニティカフェ＆レストラン。
店に登録したシェフが、その日をきりもりし、日替わりのランチを提供。ワンディ・シェフ（日替わりシェフ）。
居住者出資の駄菓子コーナー

創る・魅せる・習う
ものづくりの好きな仲間で、楽しく創りたい!!
多くの人に作品を見てもらいたい!!
こんな想いから4つのマイ・ブランド。

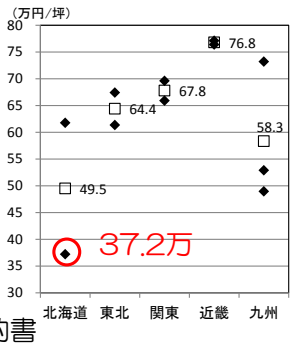
遊ぶ・学ぶ・育つ
子育て応援　つどいのひろば。
社会の宝である子どもが健やかに育ってほしい、子どもを育てるママの応援・手助けをしたいという思いから立ち上げた。

１１．実態（2009 年度高齢者生き活きグループリビング調査から抜粋）

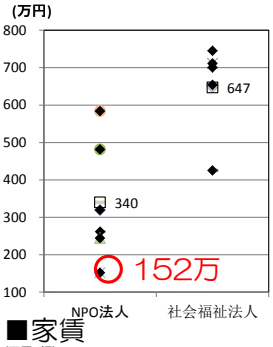
たすけ愛の家の特徴

1．高い入居率
（現在満室で3人入居待機中）
2．入居契約書の契約期間・
　　更新期間が長い
3．入居一時金が0で月払い
　　費用が安い
4．初期投資額が低い

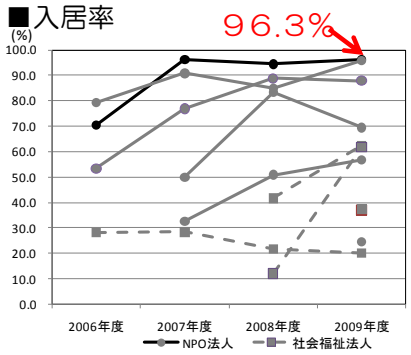
■坪単価



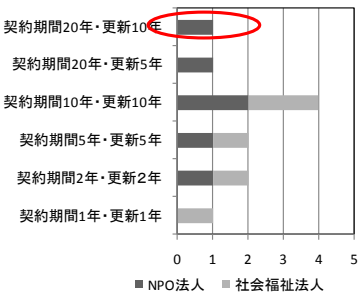
■初度調弁費



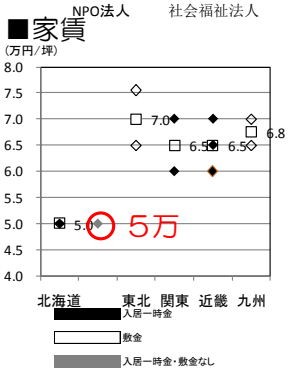
■入居率



■契約書



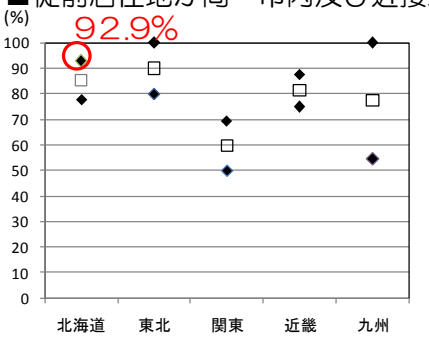
■家賃



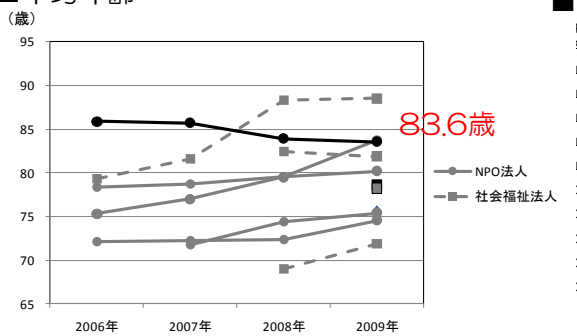
たすけ愛の家の入居者の特徴

1．高齢（平均年齢84歳）
2．同一市内出身者　9割
3．平均要介護度　0.14

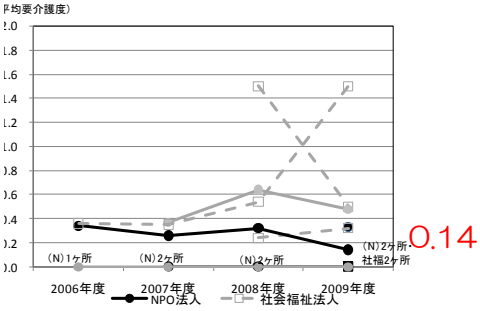
■従前居住地が同一市内及び近接地の割合



■平均年齢



■平均要介護度



２　建物写真

１．グループリビング「たすけ愛の家」

外観　奥の黄色の建物　グループリビング「たすけ愛の家」
　　手前の建物　コミュニティカフェ＆レストラン等のある「ともかな」

事務室

共用トイレ

厨房

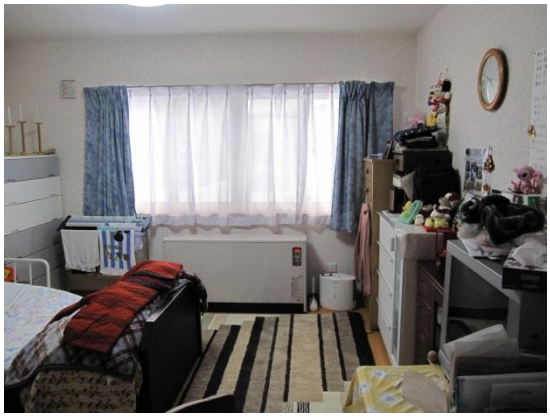
食堂

サロン

サロン

食堂

食堂



居室

居室　洗面台

居室　ミニキッチン

居室　給湯器

居間

居間から廊下を見る

居間

洗濯室

ゲストルーム

吹き抜け

乾燥室

共用部　浴室

脱衣室

２Ｆ談話コーナー

２．コミュニティカフェ「ともかな」

駄菓子屋
「たすけ愛の家」の居住者がオーナー

左側は地域の人の手作り販売ブース

ものつくり

子育てサロン

キッチン　ワンデイシェフ

カフェ＆レストラン

３　居住者との懇談会

居住者代表　宮崎喜一氏の挨拶

胆振地区は道南なので、北海道では一番暖かいところです。

そこにいぶりたすけ愛という家が出来まして私達はお世話になっている。つくづく幸せだなぁ。年とってこんないい生活が迎えられるとは思っていませんでした。でも今ここでこういう仲間と穏やかにおいしいご飯を頂いて、こうやって暮らせることはどんなに幸せなことか。だからこそ、他のお年寄りにも分けてあげたい。私達だけでなく、他のお年寄りにも分けてあげたい。それにはもっと、いぶりたすけ愛のような家が出来てくれればと常々思っております。

このたび、みなさんがおいでになるということを聞いて、どんな方がお出でになるのかなぁ、と首を長くして待っていたわけです。お目にかかれて本当に嬉しゅうございます。

本日はどうも遠いところからわざわざありがとうございました。

４　居住者へインタビュー（別途調査）

立地について

・このグループリビングの場所については満足している。環境がいい。秋になると近くにある胆振幌別川には白鳥がくる。鮭もあがる。散歩していても自然がたくさんあって楽しい。鹿に会うこともある。今年になって隣に病院ができた。郵便局もすぐそば。バス停も近い。（93 歳　女性）

・今年隣に病院ができた。また「ともかな」もできた。そのなかに小さいながらも我々が応援した駄菓子屋ができた。数年前には大きいスーパーCOOP さっぽろができ、その隣に薬屋もできた。便利になり満足している。（89 歳　男性）

・ここは便利でたいへん満足している。前住んでいたのは山の中の 1 軒家。買い物はバスで行かなければいけなかった。また昔は近所づきあいはあったが近隣はみんな若い世代になってしまい付き合いがなくなってしまった。（83 歳　女性）

住まいの環境について

・部屋は十分な大きさで家の茶の間がそのまま移った感じ。（94 歳　女性）

・それぞれに部屋があるのでありがたい。十分な大きさだ。1 人の部屋は何をしてもいい。部屋に入れば自由。近くの高齢者住宅は 1 室に 3～4 人住んでいるところもある。お酒を飲んで、他の人に迷惑をかけたりすることもあるそうだ。ここはそういうことはない。（89 歳　男性）

・部屋がこんなに広いところはあまりないのでは。他の住まいは見たことはないが話を聞くとどこも狭い。今までは自宅に 1 人だけだったので使う部屋は決まっていた。（83 歳　女性）

・今の部屋の広さは十分な大きさで大満足。普通なら 6 畳間ぐらいだけどここは 15 畳ある。（87 歳　男性）

生活について

・以前病院から退院した時にヘルパーをつけ、部屋の掃除を数ヶ月お願いした。何かしないと生きているという感覚がなくなり、ヘルパーに頼むのをやめ自分ですることにした。居室の掃除は毎日自分で全てしている。買い物は向いにスーパーがあるので週 1 回一人で行く。朝食の用意も自分でする。毎朝ご飯を炊いて仏壇に供える。前の日のお供えを食べる。おかずは前日の夜の残り。掃除がもしできなくなったら即頼むつもりだが自分の出来るうちは運動になるし、自分でやれば自分が満足のいくようにできる。出来るうちはやりたい。だからこのような家事など自分で出来ることは自分ですることができ、難しくなったら支援が頼める体制に満足している。今は手を動かさないと手がしびれてくるので手の運動のため編み物をしている。また以前は病院の付き添いをしてもらって

いたが今は病院が隣に出来たので一人で行く。（94 歳　女性）

・掃除はたすけ愛のチケットを買って月 2 回掃除してもらっている。ヘルパーが来ない日は自分でやっている。朝は毎日自分で作る。ごはんも自分で炊いて食べる。台所は好き。周りの人たちにお浸しを作って分けることもある。とうきびを買ってきてゆでてみんなに配ったりする。ラーメンなんかも買ってきて自分でする。買い物も自分でする。お金の管理も自分でする。米と薬は子供から送ってくる。足りなかったら買ってくる。頭と足を使って、なるべくボケないようにしている。台所は頭を使うのでいい。やれば上手になってくる。自分でできることは自分でしたい。人任せにして寝そべっていたのではボケてしまう。自分でできることを自分ですることは大切だと思う。（89 歳　男性）

・ヘルパーに部屋の掃除と買い物を頼んでいる。病院の付き添いは家族がしてくれる。ヘルパーが来ない日は自分で掃除をする。洗濯は自分で週 2 回している。朝食は自分で用意する。朝食を作ってもらうと生活費も高くなる。スタッフは家庭があるのに朝早くから来なくてはいけなくなる。みんな安い給料で働いているからたいへんだ。だから朝食は自分で用意する今のままでいいと思う。（94 歳　男性）

・朝はパックのごはんを温めて半分食べる。おかずは前の日の夕食の残り。掃除は週 1 回ヘルパーに頼むが自分でもしている。自分で気づいた時にするという感じ。そんなに汚れない。買い物は押し車を借りて向かいのスーパーに週 1 回一人で行く。デイサービスに週 2 回通っている。また前に住んでいた家の近くに 60 歳から続けている短歌教室があり月 1 回通う。地域の友人にたくさん会える。行くときは「たすけ愛」の車に乗っていく。外出は前の日から心の準備をするので生活にメリハリついていい。
（89 歳　女性）

役割について

・グループリビングでの役割は花が好きなので観葉植物の手入れをしている。また時間の空いた時は「ともかな」（居住者がオーナー）の駄菓子屋の袋づくりをしている。駄菓子屋には 3 時ぐらいになると自転車に乗って子供が来る。100 円玉を持って品物を選んでいるのをみると可愛い。たまに手伝いでおつりを渡したりする。子供も考えながら買っている。親もあそこで子供が買うのは安心だと思う。月末のミーティングでは今月いくら売れて、いくら儲かりましたと報告がある。ちゃんと明細書を配るので信頼している。
（94 歳　女性）

・住まいの中での役割はスタッフのいない日曜日の戸締りや加湿器の水入れ、見学者が来た時などの代表としての挨拶をしている。役割はあるほうがいい。そんな難しいことはやっていないので。（89 歳　男性）

・住まいの中の役割は日曜祭日に共用部のカーテンを閉めること。（94 歳　男性）

・自治会費の集金（月 1 回）、駄菓子屋の袋作りや店の手伝い、布草履用の布を割くのを不定期で手伝っている。ミーティングで駄菓子屋の売り上げを聞くのが楽しみ。布草履用

の布を割くのは頭を使わないし手先にもいい。自分から声をかけて何か手伝うことがないか聞いている。相手は私が高齢者だから頼みにくいのではないだろうか。役割はあった方がいい。責任ができるので張りが出る。ここでは 90 代の人も役割を持っている。だからみんな元気にしている。出来ることはしたいと思う。（83 歳　女性）

・役割は駄菓子屋の袋作り、店番は最初していた。邪魔になるようではいけないので今は行っていない。（89 歳　女性）

・朝新聞を各部屋の扉に差し込むことや郵便配達、庭の草花の手入れ、駄菓子屋の袋作りや通っているデイサービスで「ともかな」のチラシ配ったり、友人を連れてきたりした。役割があることに満足している。役割はなくなると寂しい。今できるうちにいろいろしたい。リハビリにもなる。（76 歳　女性）

共同生活について

・居住者との関係で肝心なことはつかず離れずが一番大切。みんなそれぞれの過去を持ち生きてきたので考えることはみんな違う。自分の物差しで相手をはかってはいけない。ここまではいいかなと親切の気持ちでやっても、親切と思う人、おせっかいだな、うるさいと思う人がいる。一線を越えてはいけないものがある。冷淡にするのもよくない、それが一番難しい。相手のプライバシーにふれないことにする。相手に対しての一応予備知識はある。大体のことはみんなに紹介してくれるのでわかる。それ以外にもみんないろいろな過去を持っていると思う。向こうから来たときには対応するが、こちらからは根掘り葉掘りは聞かない。毎日一緒に暮らすには必要な事だけを聞く。長く付き合っていくにはそれが必要。親しすぎないように、冷たくならないようにさりげなく。様子を見て「今日は元気がないな、なんだか調子悪いのでないか、体が悪いのではないか」と考えた時に、「今日これ食べたくないかい」などそれぐらいに間接的に聞くのがいい。（94 歳　女性）

・グループリビングはここなりに決まったことがあり、それを守っていけば何の気兼ねなく暮らして入れる。家に暮らすことを考えたら少し窮屈かもしれない。このような共同生活は押し付けられるのではなく自分で考えて生活することが大切だと思う。（89 歳　男性）

・以前の生活と比較すると気が楽になった。家を管理するという責任がなくなった。一方で団体の一員としての責任はある。グループリビングの生活ではみんなに挨拶をし、言ってはいけないことは言わない。これを言ってしまったら和を壊す。1／9 の責任をそれぞれ持たないといけない。（94 歳　男性）

合意形成の場について

・ミーティングではみんないいことを言うと思う。「あーしたらいい、こうしたらいい」と意見を言う。ミーティングでみんなが決めたことはみんなで守らないといけない。「あー

しなさい、こうしなさい」という普通の老人ホームのように上から命令されるのではなく、世話されるのとは違い、自主的に出来ることはする、出来ないことは頼むことができる。ミーティングで何が食べたいと聞かれることがあり、みんなで希望をいうと 2 日後には出てくる。私たちはあまり外食ができないのでそのようなことが嬉しい。（93 歳　女性）

・居住者全員でミーティングをやる。みんなで意見をいうことはいいと思う。（89 歳　男性）

・問題がある場合、直接スタッフに言う人もいるが私はミーティングで言う。（94 歳　男性）

・お互いに「あの人何思っているんだろう」という感じなので、話し合いの機会があれば何を考えているかわかるのでいいと思う。（87 歳　男性）

「たすけあい事業」について

・ここはみんなで助け合いという理念でやっているけど本当に助け合っている。ボランティアなので少ない賃金で私たちのために家庭を犠牲してきてもらっている。食事をするときは大変感謝していただく。たすけ愛の仲間だから私たちを助けてくれる。暑い時の仕事はたいへんなのに一生懸命やってもらい大変感謝している。なるべくお膳をきれいに食べ、残したものはいただいていく。（93 歳　女性）

・昼、夜は厨房に地域から奥様方が来て安い賃金で食事を作ってくれている。腕に自信のある人が集まっている。助け合いということで本当に普通ではできないことをやってくれている。お年寄りは食べることが 1 つの楽しみ。これはありがたい。（89 歳　男性）

サロンについて

・サロンはカラオケと俳句、パソコン、歌声喫茶に入っている。（89 歳　男性）

・伊藤園の「おーいお茶」で俳句が佳作特別賞を受賞した。171 万句の中から選ばれた。若いころ俳句の勉強をしていたことがあり、入居した時もう一度俳句の勉強がしたいと星川さんに言ったら地域から俳句の先生を探してきてくれた。それで俳句教室が始まった。（94 歳　男性）

・GL だけだと決まった人ばかりなのでサロンがあり外部の人が来るからいい。毎日決まった人だけだと話題もなくなるから外部の人が入ってくるのはいい。（83 歳　女性）

・サロンの参加は短歌、俳句、体操、カラオケは歌わないが聞きに行く。（89 歳　女性）

グループリビングに入って思ったこと

・グループリビングに入ってよかったことは誰の干渉もされないこと。出入り自由。黙って行くといけないので行き先は言う。上の方から命令されることはない。問題をおこさないように気を付けている。自分たちの勝手なわがままは言わず協力していこうと思っている。みんないい人ばかり。ここは利益を度外視している。スタッフは半分ボランティアでやっている。欲と関係なしの人がやっているので私たちも同じようにやっている。

叱られることもない命令されることもない。わからないことは相談に行くと話を聞いて答えてくれるので安心だ。（93 歳　女性）

・最初は病院が運営しているところに行った方が安心できるかと思い、不安だった。でも夜に病気になった時すぐに飛んで来て病院に連れて行ってくれたことがあり、それから安心している。「具合が悪くなったらすぐに言ってください。遠慮しないでください」と言われる。スタッフがいない時は居住者でお互いに助け合っている。（93 歳　女性）

・同居すると親は子供に遠慮し小さくなってしまう。子供も親に気を使う。このように離れて暮らす生活はお互いにとっていいと思っている。（89 歳　男性）

・GL に入ってよかったのは 3 年間 1 人暮らしだったので人との交流ができたこと。食事作りの負担から開放されたこと。一人暮らしの時の食事はいいかげんだった。ここでは栄養が考えられている。（83 歳　女性）

・ここは出入りの制限がないので行きたいところに自由に行ける。（74 歳　女性）

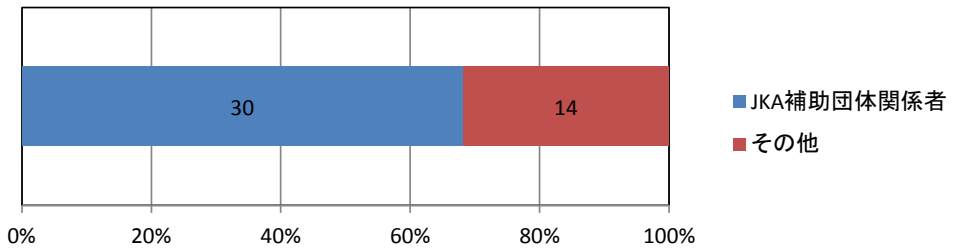
・ここに移るまでの 3 年間ぐらい 1 人で住んでいてあまり話をする機会がなかった。外に出るのは買い物ぐらいだったが買い物はスーパーなので話しをすることはなかった。ここの食事はもともと美味しいけどみんなで話をしながら食べたらさらに美味しく感じた。一人暮らしの時の食事とは違い栄養もある。（87 歳　男性）

Ⅷ　アンケート

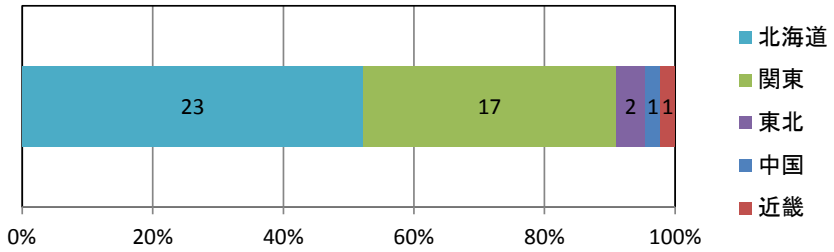
１　参加者の概要

（１）　参加人数　44 名

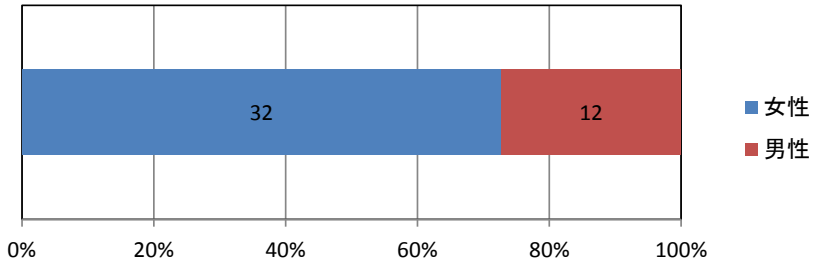
（２）JKA 補助団体関係者（人）



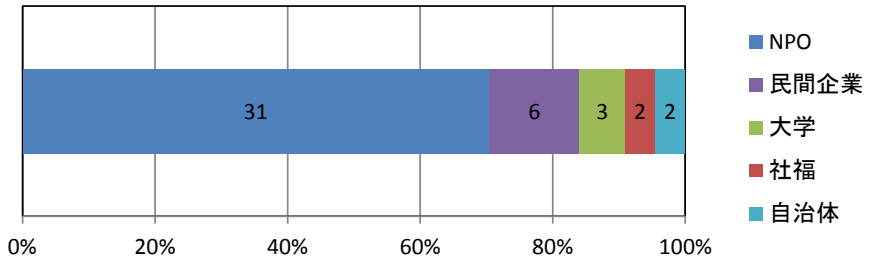
（３）地域（人）



（４）　性別（人）



（５）所属



２　ワークショップについての意見

今回のワークショップに対し、アンケートに様々な意見が寄せられました。これらを踏まえ今後の活動に活かしていきたいと考えています。

・様々な人の意見を聞くことができて勉強になった。
・これからも続けてほしい。
・渡邉さんの講演に興味があった。
・西條さんの話に勇気づけられた。
・グループリビングのネットワークを構築して欲しい。
・交流の時間がもう少し欲しかった。
・ディスカッションの時間がもう少し欲しかった。
・切磋琢磨してグループリビングを作っていきたい。

Ⅸ　ワークショップを終えて

ワークショップを成功裡に終えることができたことを関係者一同たいへん嬉しく思っております。これも補助事業延期を認めていただいた財団法人 JKA や今回の見学地を快く引き受け、いろんな場面でお手伝いして下さった NPO 法人いぶりたすけ愛の星川理事長並びにスタッフや居住者の皆様、NPO 法人 COCO 湘南の会員の皆様のご協力のお蔭です。心より感謝申し上げます。

最上理事長とワークショップスタッフ